起きたら虚無の申し子

一億年間ソロプレイ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

起きたらファフナーになっていた男。

果たして人間に戻れるのか。

注意

ファフナーの設定をいまいち飲み込めていないけど咄嗟に書いた妄想文です。

誤字脱字文章の乱れ要領を得ない文章などを含んでいる場合があります。

※タグを付け忘れていました。不快な思いをさせていたら申し訳ございませんでした。

目次

第1話　目醒めた ―― 1
第2話　平和な竜宮島 ―― 8
第3話　かひなし ―― 19
第4話　滅私 ―― 31
第5話　守れたもの、失敗したもの ―― 48
第6話　”私”はここにいる ―― 55
第7話　浮かれポンチ ―― 72
第8話　異文化交流 ―― 87
第9話　思い出してからは ―― 95
第10話　俺と鳴き出したクジラ ※お知らせ ―― 107
第11話　対談要求 ―― 117
第12話　疑い深き狐の如く逡巡するのは機械 ―― 126
第13話　縮小したクジラ ―― 138
第14話　食事は意外と必要 ―― 150
第15話　迷情 ―― 161
第16話　またの名を理想郷 ―― 174
第17話　ようこそ竜宮島へ ―― 182

第1話　目醒めた

目を開けている筈なのに何も見えない。見えなくて真っ暗で静かな空間に響くのは波の音。それから、潮の匂いがひっそりと漂っている。複数の男女の声と、何も見えない筈なのに金色に光っていると分かる物体。自分の体を動かしてみたが、体は何かが生えているように動かすことが難しかった。

〈あなたは、そこにいますか〉

女性の声で問われたそれ。

その問いに答えられるものを、未だ自分は持っていない。

すっと、眠気が冷めていくように瞼が開いた。人の騒ぐ声や怒号やらで騒がしい、視界にはちらちらと人が忙しなく動いている。寝ぼけた目で見ていくと、目の前には黒い人型のロボットが威圧感を放っていた。

（なんだこれ…）

　そのロボットにはたくさん人が集って何かをしている。そこから視線を外して周りを見る。俺が今いる場所の壁はＳＦモノとかでよく見るような白くて無機質な感じで、ロボットの目線の高さ辺りにガラス越しの場所がある。そこには白衣を着た人物と黒いスーツを着た男がいた。そいつらがコンソールのようなものを手早く入力している。
　何だか背中がむず痒い、そこだけ穴が開いてるような違和感がある。背中の方で何が起こっているのかと自分の体を見ても服に穴が開いてる訳でもない…。ロボットの方では背部のパッチが開かれて、たくさんのコードやらなにやらが露出していてツナギを着た人たちが何らかの作業を行っている様だった。ペンチやドライバーを持っている様子から、このロボットのエンジニアらしい。
（あー…なるほど。どうりで自分の背がぱっくり開いた感じが……。）
　いやちょっと待て。普通に受け入れているが、普通におかしい。なんであの機体が自分ってナチュラルに考えてやがる。
　第一、自分は人間だった筈だ。確か、こうなる前は何かに疲れ果てて眠っていた筈だ。そして起きたらいつの間にかこんな場所にいて、かつ目の前のロボットが自分だと認識している。
　…エンジニアの人、とても忙しそうだけどちょっと聞いてみよう。
「すいませんここってどこです…」

か。とは言えずに、訪ねようとした整備士は俺の存在に気付かず俺の体をすり抜けていった。

まって、本当にどうなってるんだ。

恐る恐る自分の体を見つめてみる。どこか透けた感じがある自分の体だ。でも本来、人の体は透けない。

（ゆ、幽霊だ…これ…）

状況を整理しよう。目が覚めたら、ロボットだった。ちょっと翼が生えて黒がベースでかっこいい感じだ、うん自画自賛だな。背中のむず痒さも整備士が背中のハッチ閉めたら収まったし、そのせいで自分があの機体兼幽霊なのも納得してきた。目の前で整備されている自分を動かそうとしても動かない、ロックが掛かっているようだ。

それから俺の名前を思い出そうとすると機体コード：マークニヒトと出てくる。俺、そんなカタカナの付いた名前じゃなかったぞ、絶対に。いくら飲んだくれでもろくでなしでも自分の名前くらい覚えてる筈だ。でもマークニヒトという単語しか出てこない

ので俺の今の名前はマークニヒトなんだろう。
それに、名前だけでなく眠る前までの記憶がほっとんど無い。何かキーワードがあれば思い出せそうな気もするが、大体俺は男で、ロボットになる前は寝ていたってことしか思い出せない。
どういうことだよと考えて、漫画やアニメを嗜んでいた自分から出たのは転生と憑依の文字。整備されてるニヒトの機体も自分だけど、今浮遊しながら上下に回りながら考えてる幽霊のような俺も俺だ。体が二つあるといえばいいのか、不思議な感覚だ。
ちなみにこれが夢だという考えはすぐ消えた。いくら頬をつねっても俺（ロボットの方）を蹴ったら足の親指と蹴った箇所がめちゃくちゃ痛くなった、それでも醒めなかった。現実は無常だ。

うっ

ちょ、待って、何か脳に繋がれてる感覚がする！ぞわぞわする、とてもぞわぞわする！

ジークフリート・システム　ファフナー　同化現象　変性意識　シナジェティック

コード計測　フェストゥム

頭にパッと知らない単語が浮かんでくる、それと同時に説明も入ってくる。なるほど、情報の入力だったのか。知らない単語の筈なのに、でも何処か馴染みのある単語のような、そうでないような…。

脳のぞわぞわも落ち着いたようだから、入力されてきた情報を見ることにする。何かしらの単語が記憶を思い出すきっかけになるかもしれない。

さっきまでロボットって言ってたけどファフナーって言うのか。しかも世界に二つしかないザルヴァートル・モデルとやら。設計思想は【より多くのフェストゥムを倒す】。見ていろ日野洋治、…最後のは私怨じゃないのか？

フェストゥムってなんだ、そんなに殺したい生物？人？種族か民族の名前？

フェストゥムは…金色の体をしたケイ素生命体。特徴的なのは同化現象と読心、ワームスフィア現象。常に学習し進化するので厄介と。とりあえずコアを潰せば活動は停止すると。問い掛けにもあまり答えない方がいいのか。

ファフナーはフェストゥムに対抗できる有人兵器。ファフナーのパイロットは機体と一体化して戦う。その際に変色体に変異が起きてしまい、寿命を縮めるのが主な特

徴。もうちょっとマシな武器は開発できなかったのか…。しかもそのパイロットの条件も限られてるようだし、適性の持ったパイロットがうじゃうじゃいるのか？と思ったがこのザルヴァートル・モデルや他のモデルが特殊なだけで、軍で使用されているモデルではそうではないようだ。リスクを持った分だけ攻撃力が上がるってことなのか…。

おっ、自分に搭載されている武装も確認できるのか。肩のホーミングレーザーにアンカーユニットによる動作妨害兼ハッキング処理。確実に殺せるように、みたいな殺意マシマシの武装だ。…えーと、設計者はミツヒロ・バートランド。この人、フェストゥムにどれだけ殺意抱いてんだよ、設計されてる側から見ても怖えーよ。

一旦、情報の読み取りを止めよう。頭が痛くなってきた。頭が痛いというか、体全体が熱い。ちょっと冷まさなければ…。

ん？胸のあたりがそわそわする。エンジニアたちが胸の部分の整備を始めたようだ。

あっちょっと、もうちょっと丁寧に胸のパーツを取り外し…痛っだぁ!?

…。

うん…。

なんだか自分が機体になってる感覚が普通になってきたが、俺は人間に戻れるのだろうか。戻れるなら早く戻りたい。戻ったらやらなければならないことがたくさんあるしな。

第２話　平和な竜宮島

Q．人間に戻りたいとか言って何日が過ぎました？
A．大体二週間

機体の方にカレンダー機能もあったからそれを眺めながら過ごす事二週間、二週間も経っている。二週間もいればエンジニアの顔ぶれとかも覚えるし、俺が人間に戻れるかも疑わしくなってくる。着々とファフナーは完成に近づいていってるし。

父親ともいえるミツヒロ・バートランドは喜びながらマークニヒトを完成へと近づけている。本当にうっきうきだ。笑顔じゃなかった日は、マークニヒトのコアが過剰反応を起こして熱が出ていると聞いて、徹夜しても原因不明のままで放っておけって匙投げた時くらいだ。

「ふむ…後はパイロットを使ったテストか」

「はい、理論上搭載できる機能は全て取り付け、後はパイロットの負荷計測と動作確認のみです」

「レスポンステストのみということか…、パイロットも人類軍の者では同化作用に耐えきれない、…島の人間が必要だな。」
そう言って少し考えながらミツヒロはあぁ！と思い出したように言い出した。
「少し出掛けてくる、二日程空けるが調整は続けろ。
それから、手土産が無かった時の為に彼女を呼んで来い、拘束は解くように言ってある」
「了解しました」
白衣の研究者にそう告げてミツヒロはさっさと部屋から出ていった。何処に出かけるのか、少し気になるのでミツヒロの後を追いかけることにした。ずっとあそこにいても変わり映えしないし。それから透けた俺があの機体からどれだけ離れて動けるのかも気になるし…ってもう飛行機手配して乗ってる、フットワーク軽いな。

「では、一人の父親として娘に会いに行くとしよう」
そう言って、飛行機内でミツヒロは通信を切った。旅行先で誰かと連絡を取り合って

いたみたいだ。その通信先では男三人しかいなかったし、心良くも思われてなさそうな反応だった。

それにしても、娘に会いに行くんだ。わざわざ飛行機使っていく程遠い場所に？複雑な家庭事情なのか。…あんなに機体ばっかり弄っていれば、家族との縁も疎遠になるか。

（というか、ここまで離れても大丈夫なんだ。）

遠くの方で機体の俺が整備されてる感覚はしているし、目も機体の方と同期すればあのエンジニアたちが作業している姿が見える。こうしてみると、本当に人間じゃなくなったんだと実感してしまう。

「そろそろ到着か」

飛行機が降下するアナウンスが入った。

窓を見れば雲に覆われた島が見えた。それから、ちろちろと道を歩いている人も見える。そんな細かい所まで見れることに今更ながら驚いた。着々とファフナーに近付いていってる、人に戻りたい。

落ち込む空気をよそに、海辺で何やら楽しそうに遊んでいる人たちが…。子供と保護者？子供は１１人、大人は２人。その内通信先で見た覚えのある茶髪もいる。へぇ、まだ子供だったんだ。いや、アルヴィスの制服が白色だったな…。

ビーチボールを持った長い黒髪の女子はこっちを見ていたが、気のせいだと思って視線を逸らした。

無事に何のトラブルも無く旅行先の島、竜宮島へと到着した。ここからどうしようと考えたがミツヒロにずっと付いていっても面白くなさそうなので、別行動することにした。帰るときに合流すればいいだろ。

という訳で、久しぶりの外だ！空気が美味しい…、今まであんな閉鎖的な空間にしかいなかったからか、外の空気がとても新鮮に感じる。

とりあえず辺りをうろうろすればいいか。確か、前もふらふら散歩するのが楽しかった覚えがある。

あれは…駄菓子屋だ。駄菓子屋なんてまだあったんだ、流石文化の保存を目的とした島。お金があったなら何か買おうと思ったが、今の状態で食事なんて出来るのか？確か今の俺は空気中の微小物質やらなんやらを同化してそのエネルギーで動いている状態らしいが…ってその前に幽霊って透けた状態で物を食べられるかって話だ。

飛行機に座れやしたけど、物を口から取り込んでエネルギーに変換する必要が今の俺には無いし、怪しい所だ。

でも見てるだけでも美味しそうに見えるんだよな。きなこ棒とか、ひも飴とか。

「駄菓子屋に入らないの？」
「入ってもなぁ…。買うお金も食う必要も無いしな」
「そうなの？私はよく食べるよ」
「私はって…」
え。
今、俺、誰と話してた？
「初めまして、ファフナーのコア」
飛行機で目が合った少女が背後にいた。驚きで飛び上がりたいのを抑えて、女子と向き合う。それよりも聞き捨てならない言葉が聞こえた。
「ファフナーのコア？俺が？」
「気付いてなかったのね」
呆れたように笑われた。ぐ、ファフナーのコアなんて発想、普通は無いし…。
目の前の少女が目を細めて笑う。あれ、何か目の瞳孔が特徴的だ、なんだかこの目は何処かで見た覚えがある。入力された情報に何かないか。いや、それにしても。
「俺が見えるのか？」
「うん、でも人の形をしたもやだってことしか分からないよ。不思議な形ね」
今の俺、他人から見れば黒い人の形をしたもやなのか…。俺から見れば普通に服も来

ているし、笠も身につけているし、袈裟の調子もばっちりなんだが。一体何故だろうか。
「何で貴方はこの島に来たの？」
「さっきこの島にミツヒロって奴が来たんだ。俺はそれに勝手に付いてきただけで、特に深い理由はないよ」
「ふぅん？」
訝し気に此方を見つめてくる。それからぐるぐると俺の周りを回りながら考えること数分。満足したのか少女は離れた。その数分の間に瞳孔の答えが出た。
「貴方がこの島を自由に出歩くことを許してあげる」
「それはどうも。竜宮島のコア」
「…気付いたのね」
「その瞳孔の形、確か島のコア特有の物だってことに気付いたからな」
そうだ、あの瞳孔の形は島のコアと呼ばれる存在の特徴の一つだった。島の名前は入力された情報から出せた。瞳孔については入力されてなかったが、きっと昔の俺の記憶だろう。ナイス俺の記憶。
「おーい、どうしたの乙姫ちゃん。って何そのもや！」
「もしかして、幽霊…？」
「ゆ、幽霊なんている訳ないでしょ」

わらわらと後ろから浜辺で遊んでいた子供たちが来た。どういった集まりなんだろう。
「なんか…邪魔したみたいだな」
「「しゃ、喋った！」」
「離れた方がいいよ乙姫ちゃん！」
「ううん、この人は大丈夫だよ芹ちゃん。この人は私と同じような存在だから」
「同じような存在…お前は、島のコアなのか？」
長い薄茶の…先程の通信先で見た少年が話しかけてきた。よくよく見ると左目に傷痕があった。
「ファフナーのコアらしい」
「ファフナーの…？」
「そんなことがあり得るのか？」
「あり得るんじゃないのか。俺もさっき竜宮島のコアに教えられただけなんだけどな」
笑いながら言ったつもりだけど、今の俺はただのもやなんだっけか。黒髪の少年と薄茶の少年は益々顔を顰めた。
「ま、お前らに何らかの危害を加えるつもりはないよ。そんな事したら竜宮島のコア

に追い出されちまう。」
そう言って集団から離れるように散策を始めた。

「本当にあの存在に島を徘徊させて大丈夫なのか？」
「大丈夫だよ、総士。今のところ純粋に島を楽しんでるみたい」
「楽しむ…？」
「お前たちに危害は加えない」と言った、ファフナーのコアを自称する人型のもや。その存在によって島の平和が崩されるのではないか、新手のフェストゥムではないのか…そんな疑問が胸に残っていた。
それでも、落ち着いたように乙姫は言った。大丈夫だと言われたなら、そう思うしかないのだろう。
「ねぇ総士。本当はファフナーに乗れるのに、その人を庇うために嘘を吐いている人がいたら、総士はどうする？」
「データ隠蔽は重大な裏切りだ。しかし、罪に問うかどうかは場合による」
「ふふっ、そう言うと思った。いいわ、特別に教えてあげる」

乙姫の口から出された言葉は、僕に衝撃を与えるには充分な物だった。

◇

竜宮島を歩くこと数時間。すっかり俺は疲れていた。いやー、幽霊になっても歩き疲れる概念があるなんてと驚くと共に、まだ俺にも人間らしいところを見つけれて嬉しかった。まだ俺は人間なんだ、だからファフナーのコアだったとしても戻れる筈だ。

今の俺は鈴村神社という小高い場所にある神社で休憩していた。

（あの飛行機の前にいる金髪…ミツヒロだ！）

飛行機前でミツヒロと竜宮島のコアと話していた時に見かけた茶髪の少女が会話している。ミツヒロ帰るのが早すぎないかと思いながら、俺は急いで飛行機前を目指して走った。壁も物もすり抜けられるので一直線だ。こんな時は幽霊で良かったと思う。

「闘いに勝ったとしてお前に何が残る」
「勝てるなら何も残らなくていい」

急いで飛行機前に来たら、周りの空気は重い物だった。
どうしてそんな話題になったかは分からないが、ミツヒロのその言葉はやけに重さを持っていた。
「状況は絶望的だ」
そう吐き捨ててミツヒロは飛行機に乗った。俺も遅れずに乗り込んだ。竜宮島のコアがこちらを見て手を振っていたので、俺も手を振り返した。ミツヒロと話していた茶髪の少女が驚いたようにこちらを見ていた。

（竜宮島…平和だったな）

窓に近い席に座る。竜宮島は全員が全員、いきいきとしていた。データの中でしか見たことのない〝平和〟っていう物を感じた気がする。何か、俺の感覚だと、島民ってあ

まり優しくない感じがあったから。何だろうな、平和なのは良いことだけど胸がもやもやする。

（これって〝羨ましい〟？）

羨ましい。なんでそんな単語が出てきたんだか。記憶を無くす前の俺は嫌な事でもあったのか。考えても、記憶が断片的で朧げではっきりと思い出せないから、答えは見つからなかった。

俺が作られている基地に着くまでは長い距離があるから、少し目をつぶることにした。

ニヒトになってから、眠れた試しが無いけれど。

第3話　かひなし

第一アルヴィスにいる娘に会いに行ったミツヒロだったが、その娘には素気無くされてしまい傷心…。かと思いきや、そういう風ではなかった。

無言で怒ってやがる。あからさまに不機嫌ですという顔をしながらガラス越しの部屋で椅子に座っている。周りの研究員も少し怯えたような表情だ。

純粋な気持ちではなく、あの時言っていた〝島のパイロット〟というかフェストゥムの因子を組み込まれた子供の調達と、離婚した妻で人工子宮コアギュラの設立に一役買った遠見千鶴さんを新国連側に連れてこうとしていたらしい。

わぁ…。疑いようもなく自分の作るザルヴァートル・モデルに一途なのが分かる。それは人間としてどうなんだミツヒロ…。家庭を大切にした方がいいだろうに…。こんな父親に誰も付いていきたくないな、俺だってそう思う。

場合によってはあの茶髪の女子が俺に乗っていたかもしれないと思うと…うん。とても賢明な判断だと思う。

俺は、他のモデルより燃費というかパイロットの同化現象を進行させるのが早いらしい。

竜宮島から帰ってきた後のこと、新国連で密かに行われている実験のせいで、人類軍兵士でも俺を動かせないかという説が出てきたようだ。

その実験というのは、とある島…というか竜宮島のパイロットから複製したフェストゥムの因子を人類軍兵士に投与して、竜宮島のパイロットのようにフェストゥムのコアを使ったファフナーを運用してみよう…みたいな感じだった気がする。

人類軍兵士が主に乗っているファフナーは大体がグノーシス・モデルというフェストゥムの因子やシナジェティックコードも必要なく、誰でも訓練すれば乗れるモデルが運用されている。グノーシス・モデルにはフェストゥムのコアを使用しておらず、同化現象も竜宮島で扱っているモデルよりは抑えられている。

竜宮島のモデルが扱っているのは…ティターン・モデルだかノートゥング・モデルだったような気がする。そのどちらもが機体にフェストゥムのコアを使用しており、同化現象がグノーシス・モデルより進むのが早い。フェストゥムの因子やシナジェティックコードを形成できるように、遺伝子段階で弄られた子供、人工子宮コアギュラから産まれた子供位にしか扱えないモデルだ。

その実験を聞いたミツヒロは投与した兵士を3人ほど寄越すように上層部に言ったらしく、そんなこんなで、複製された因子を投与された人類軍兵士が3人、俺に乗った。乗った人類軍兵士の3人中3人が同化現象の末期症状を起こして、割れていった。

俺に接続した瞬間、緑色に光る結晶がニーベルング・システムと接続した指から、手から生えてゆき、体中にその結晶が生えた時に、一斉にバリンと音を立てて割れた。体の一片も、髪の毛一本すらも残らず結晶になって割れた。

ただ俺と接続しただけで結晶が生えて死んだんだ。俺と同期する前にあっさりと、簡単に死んだ。コクピット内にあった人の温かさが瞬時にして冷たくなっていく。それに伴って、中途半端にパイロットと接続されて、結晶の生える痛みが俺にも伝わっていた。腕の中を、体の中身を無理矢理中から引きずり出されるような痛み。割れた瞬間には、強く叩かれたような痛み。頭が首までめり込むような強さで叩かれて、じぃんと衝撃に耐えている間にパイロットの命は絶えた。星の飛ぶ視界の中で見えた飛び散る結晶は、人の命だった。

こんなに危険な機体だとは思わなかった。こんな簡単に人を殺せるものだと思って

いなかった。

なんて言っても、俺が人を3人も殺したことなのは紛れもない事実だった。震えた体と、俺の危険さに怯えた心中で、慣れていないお経を唱えた。せめて、肉体は結晶になって消えてしまっても、魂だけは輪廻転生の輪に入っていますようにと祈っておくことしか、命を奪った俺には出来なかった。

その事件から、何とか同化現象もとい俺と同化する際の負荷をどうにかして幽霊の俺に回せないかと考えていた。俺に回せば、パイロットはすぐに同化現象の末期症状、肉体の結晶化を引き起こすことはないと考えたからだ。

ファフナーに乗る時点で変色体の変異は決まっているようなものだが、少しくらい寿命が延びたって罰は無い筈だ。

…とは言っても、俺に負荷を回そう計画は企画段階で終了した。よくよく考えても幽霊の俺はパイロットに負荷を与えるマークニヒトだ。そのパイロットは俺と同期して動かすのだから、結局負荷はパイロットに掛かる。

それに、こんなこと実践しようとしてまた人が死んだら嫌だからな。

代わりに幽霊の俺が機体の俺を操縦する案も出た。自分の体を動かすようにして機体の体も動かせるだろうと考えたが、不思議なことにまったく動かせなかった。

本当になんでだ。マークニヒトは俺で、機体の俺も幽霊の俺も俺であって動かせないということはまったく無い筈だ。

これについてはまったく考えても答えが出なかったので保留だ。早くその答えを見つけられたらいいのだけれど。

そして、結晶化によって3人の命が消えた日から二日後。

外されたコクピットにシナジェティックスーツを着た黒髪の女性が入っていくのが見えた。人類軍兵士といった感じではなく、どちらかと諜報とかスパイとかやってそうな女性だった。

俺は、また人を殺してしまうのではないかと気が気でなかった。女性を乗せたコクピットが迫るときなんて、女性が処刑台に登っているような光景に見えた。

それでも、女性を乗せたコクピットがマークニヒトに接続される。その際に、俺にも腹部に痛みを感じる。

…ああもう、こういうことが起きると本当に人間に戻れるのか不安になる。

そして、目の前で黒髪の女性が苦し気な声を上げて接続された。

…。

……。

どうやら、直ぐに末期症状は起きなかったようだ。ほっとした…。

パイロットの情報が俺に流れ込んでくる。狩谷由紀恵、竜宮島から逃げたフェストゥムの因子を埋め込まれた人間。今の彼女はその因子を末期症状の限界まで増幅されている。それに加えて、ファフナーの搭乗限界の年齢であることも確認できてしまった。

このまま俺に乗っていれば、俺が狩谷の命を奪ってしまうのは、考えなくても分かることだった。

負荷がどうにも出来ない、俺がパイロットの命を死なせるというのなら、俺はパイロットをサポートすることに徹底する。戦闘時での雑魚処理とかアンカーユニットによる妨害工作とかフェストゥムのガードの中和など、やれることはたくさんある筈だ。

より多くのフェストゥムを倒せるように。同化現象の末期症状が起きても、悔いが無いように。

接続して俺と同期したからか、狩谷はコクピット内に浮かぶ俺に気付いた。
「何よこのもやは…」
「初めまして。俺はマークニヒト。」
「マークニヒト…!?」
「詳しい説明は省くが、お前をサポートするシステム程度に考えてくれればいい。」
「マークニヒトのサポートシステムですって…?そんな機能、ミツヒロさんから聞いたことが無いわ。嘘を吐くのはやめてちょうだい。」
キッと睨む狩谷には悪いが、事実だ。パイロットと俺が同期したおかげで、俺への猜疑心やら困惑やらの感情がありありと流れてきている。仕方ないけど、実感を持たせる為に言った方がいいのかね。
「このまま俺に乗り続ければ、お前は死ぬけどそれでいいのか?
想い人であるミツヒロに、想いを伝えなくていいのか?」
この言葉を聞いて、狩谷はハッと目を見開いた。
「何故そのことを…!
…いや、これが私と同期しているということね…。」
それから何処か納得した様に顔を振った。納得してくれたようで何より。パイロットと潤滑なコミュニケーションが取れないと、俺が上手くサポートできない場合とか、

サポートした状況を上手く生かしてくれない場合があるからな。フェストゥムの攻撃でパイロットを殺したくはない。

せめて死ぬなら活動限界になってから…。じゃない。何を言っているんだ俺は。そう、易々と人の死を願うなんて。

俺の考えたことが伝わったのか、狩谷は顔を顰めながらこちらを見た。

「悪いけど、余計なお世話よ。

貴方がマークニヒトのサポートシステムというのなら、フェストゥムをより多く倒せるように私をサポートしなさい。」

「もちろん、元からそのつもりだ。」

挑戦的に笑った狩谷にこちらも口元が上がる。よし、こちらの準備は大丈夫。いつでも出撃できるぞミツヒロ。

「我々は、私によってこの場所を理解し終わった。」

背筋が、ぞっとした。人の言葉を喋っているのに、人ではない感じ。コンソールの方で研究者のおっさんが金色に光り、茶髪の青年に変化した。なんだ、あれ…！いや、人型のフェストゥム…!?

「我々はお前たちの感情と力を私によって獲得する。」
「テスト中止!ファフナーの中を完全閉鎖しろ!」
異変に気付いたときにはもう遅かった。体が何かに入り込まれている感覚がする。隙間という隙間から、俺の全てを解析されているような気持ち悪さがする!
それから、ニーベルング・システムに接続した手から狩谷の体が緑色の結晶に包まれていく。
痛い、狩谷の痛みを伝わって凄く痛い…!結晶化に伴う痛みと解析される気持ち悪さで、どうになってしまいそうだ。システムの方にも入り込んでくる、気持ち悪い、かき混ぜられている、気持ち悪い気持ち悪い、何かが生えていく!

ぬるりと目の前に茶髪の青年が現れて。

「お前は私だ」

心臓を掴まれた。

同期対象が狩谷からフェストゥムに変わってしまった。いけない、このままだと狩谷が同化される、俺も同化されて制御できなくなる！

体が、肩のレーザーに信号が走る。待ってくれ、この場所でそんなレーザーを出してしまったら…！止まれ、止まれ止まれ!!

それでも、俺の体は無差別にレーザーを放射して基地を壊していく。人を、殺していく。

狩谷は結晶化の痛みで狂ったように叫んでいる。俺にも痛みが伝わっている。

「私の、私の夢だハハハハハハ!!!」

壊れた格納庫、死んでいった研究者の死体を背に、ミツヒロは笑っていた。

そんなミツヒロ目掛けて、俺は腕を振りかぶって潰した。

腕に、濡れた肉の触感がする。指の隙間に液体が入り込んで、掌が濡れていく。掌から、鉄臭い香りがする。千切れた黒いスーツの破片も見える。

機体の方ではぺっ、と汚い物を拭うように壁に手を擦りつけた。ずるりと肉が引きずられている。ミツヒロの、死肉だ。

体が、機体の俺が止まらない。

「ミツヒロ、さん」

狩谷は絶望しきった声で呟いて、全身に結晶が生えきった。それから、狩谷の体が金色に光ってフェストゥムと同化していく。髪を振り乱しながら、狩谷が男性の形になっていく。その様子は練られた土のようだった。

敵だ。フェストゥムという敵が、敵を殲滅する筈の機体に乗っていた。

「これが、憎しみ…っぅっぅ!これがぁぁぁぁ!!」

狩谷と、茶髪の青年の声が混じった気持ちの悪い音が響いた。青年は涙を流しているような、怒っているような顔をして叫んだ。

胸の内に、愛しい者を無くした憎しみが、敵への憎しみが混ざり合って広がっていっ

た。それは狩谷が感じた物だけど、俺の物ではない。

俺の視界は、暗くなっていった。

第４話　滅私

　真っ暗で静かな空間にいる。いや、海？嗅いだことのある潮の匂い、静かに鳴る波の音。一度来たことがあるような…。
　一度じゃないな。何度も何度も来た覚えがある。とはいえ、こんな真っ暗な空間じゃなくて誰か一人はいたような気がする。例えば茶髪でおかっぱの少年とか。なんでそんな具体的な容姿が思い浮かぶんだか。
　いつものように歩いてみようと体を動かそうとしたら動かなかった。
　何が起きていると思いきや、体に結晶が刺さっている。って、これ同化結晶だ。でもこんな緑から赤に変色する物だったか？刺さった箇所から赤くなっているような。
　とはいえ俺は串を刺された鶏肉の如く、同化結晶が無数に体を固定するように刺さっている。それでも血は流れていない、幽霊だから流れないのか、それとも血が同化されていっているのか。不思議と痛みも感じない。
（じゃあ機体の俺の方で状況確認でも…痛っ）
　機体の俺と視界を繋げようとすると、ちょうどぼやけた状況だったのか、何が起こっ

ているのか分からなかった。そして、急に目に痛みが走って繋がりを切られた。目玉に何か生えているみたいな痛さだ。もしかして機体の内部の方にも結晶が生えているのだろうか。結晶が機体の俺との繋がりを邪魔しているのか…？

（…どうしよう、あれから一体どうなったのかも分からない。）

とりあえず、狩谷が同化されて俺も同化されたことは分かっている。研究者や整備士、ミツヒロも殺してしまったことも。それで、あの後の状況が一切分からない。視界を繋げることも出来ない。八方塞がりだ。

…いや、機体の俺の状況は分からなくとも、幽霊の俺の方で何とかできないか。体を串刺しにされているからってなにも出来ない訳じゃない。

首は結晶が刺さっていなかったから動かせた。

周りを見渡せば真っ暗だった空間が赤い結晶の…筍だらけになっていた。

よくよく見れば雨のように人間や戦闘機、ファフナーが落ちていっている。人間に関しては一人だけじゃなくて大勢の人間。戦闘機やファフナーだけじゃなくて土とか、木とか、コンクリートとか。

落ちていった人の中には狩谷らしき姿もあり、赤い結晶の筍に触れては消えていった。そして、その分だけその筍が大きく育っていた。どんどんと背丈が大きく伸びていく。根元の周りも落ちていった人や物の分だけ太くなっていった。

そうして時間が経てば経つほど、赤い結晶の筍が成長し、また増えていく。筍は今や見上げる程大きく太い竹。それが何本も成長して暗い空間は一瞬で竹林になっていった。はらはらと赤い結晶の粉が降ってくる。

「お前は誰だ。」

声を掛けられた方向を向くと、あの茶髪の男がいた。自然と眉が寄る。人の形をしたフェストゥム。目は、最近見たことのあるような特徴があった。

（島のコア…？）

「お前は何故完全に同化されない、何故我々の祝福を受けない。」

何処か苛立った様子で聞いてくるその男は、年相応ではなく子供が癇癪を起しているようにも見えた。…疲れているのかもしれない。

でも、相手はフェストゥム。人間の年齢における表情や動作の幼さなんてものは関係ないのかもしれない。

…それよりも、茶髪の青年と会話が出来るならしてみたいと思った。なんで俺がここに刺さっているのかとか、感情を理解しようと思ったのかとか、色々と聞いてみたいことがある。

「お前が生かしてるんじゃないのか。」
「違う。我々はお前を同化した。」
「へぇ…。」
「我々は、人間の感情を理解した。人間の道具の使い方を理解した。
お前はなぜ存在している。同化した筈なのに、なぜお前はそこにいる。」
「なぜそこにいるかだって？」
そんなことを言われても困る。眉が更に寄るのが分かる。
同化した筈だって？確かに俺は、意識を失う前に狩谷も俺も、同化されたのを感じたけれど。
なぜここにいるかなんて分からないし。それらしいことを知ってそうな記憶は未だに思い出せてないし。
「記憶が曖昧というのなら我々はお前に思い出させてやる。」
青年が俺に手を翳す。何だか嫌な予感がしてその手を見ないように目を瞑る。
それでも閉じた瞼を無理矢理こじ開けられるように、映像が泡のように浮かびあがる。

尼僧に叩かれた誰かがいる。怒鳴られて縮こまった誰かが、怒号を聞いて目を見開い

てその場を飛び出した。

赤い液体に包まれた少年がいる。楽しそうに誰かに話をねだっている。

誰かの墓石の前に立っている。笠を身につけた誰かが経文を説いている。その遺体の無い墓石に、胸が潰れてしまいそうな程の悲しさを感じる。

誰かの前に、白衣の人物が立っている。その人物から吐き気を催す程の嫌悪感を感じる。

金色に発光するフェストゥムがいる。「あなたはそこにいますか」と問い掛けたフェストゥムのコアを握り潰した誰かがいる。

ぐらり、一気に情報が流れ込んできて気が遠のきそうになる。あの尼僧、あの誰か、あの少年、あの白衣の人物。それから、それからーーー。

目の前のお前はーーー。

「〝お前は息子の代わりにはなれない〟」

その声にはっと意識を引き戻される。

聞き捨てならない言葉。

言われたのはたったの一回、それでも何度も何度も脳に刻み込まれたその忌々しい言葉。

かっと体が瞬時に熱くなる。混濁した記憶も朦朧とした意識すらもはっきりとしていく。

「お前はお前の母親にとっての出来損ないだ。」

記憶がはっきりとしていく。頭を揺らされる感覚がする。何が浅ましいだ。何が出来損ないだ。その言葉を何度も飲み込むほど体が震えていく。体内の血が沸騰していく！

あの時の頬の痛みに倒れた体の痛み。言われた言葉で殴られた衝撃が蘇る。

「それなのにお前は浅ましく、お前の母親に泣き縋っている。」

「その言葉を言っていいのはあの人だけだ!!!」

殴りたい。

目の前にいる青年を殴りてぇ！

体に刺さる結晶が動きを邪魔する。思い通りに体を動かせない。殴りに行かせない！

指すら動かせなくなるほど結晶が育ち、体に刺さっていく。ああ邪魔だ！

目の前の青年はそんな俺の様子を見て笑ってやがる。ああ憎たらしい！

「…我々はお前を同化するのは保留にする。」

「何が保留だ！さっさと俺の中から出ていきやがれ！」

澄ましたツラを睨めば何も言わずに青年は出ていきやがった。

（さっさとコアを破壊されろあの腐れ土人形!!）

ぶつけようのない感情が体内で回っている。あの言葉を言っていいのは俺の母親だけだ。他人が勝手に言っていい言葉じゃない。

俺の記憶を覗き見ただけの他人が、ただの人型の土程度が口にしていい程あの言葉は軽くない！

（あぁクソ！クソしか言えねぇ!!）

体はますます動かなくなる。動こうとする俺を制するように結晶が育ち、動きを阻害

する。

そんなことをしている間にも怒りは収まらず、苛立ちで体温が沸騰していくだけ。

勝手に記憶を読まれて、強制的に記憶を思い出させられた。その記憶を読まれて一番忌々しい言葉を吐かれた。ただの土くれ如きに！

あの土くれが感情なんて分かるものか。狩谷の憎しみを同化して学習して、それを感情だなんて呼ぶような奴が。憎しみだけで人間の感情は構成されていないんだ。そんな単純だったら人間なんて直ぐに滅びている。

（いった！）

急に脳に刺激が走る。なんだこれ、膨大な情報が流れ込んでくる…！

いや、この情報は第一アルヴィスの物？第一アルヴィスのブルク内の情報に、第一アルヴィスに格納されている機体情報、地形にその他諸々。

一体、俺の体に何が起こってるんだ？

〈ーこーてるー?〉

…この声。あの竜宮島のコアの?いや、何でこんな時に聞こえてるんだ。

〈聞こえてるの?〉

ああ、聞こえる。竜宮島のコアの声が聞こえている。

〈…あなたは、私。私は、あなたよ〉

どこか暖かいその言葉が聞こえた瞬間、俺の体に刺さっていた結晶が割れた。急に割れたおかげで受身も取れずに倒れた。その衝撃なのか、胸がとても痛い。

(いや、絶対倒れたからじゃない。何でこんなにも心が痛い?〝苦しい〟?)

〈良かった、貴方はまだそこにいるのね〉

崩れた姿勢を直す。誰かに急かされるように機体の俺と視界を繋げさせられて見えたものは、二機のファフナーが俺の胸を突き刺した瞬間。
心臓と胸に穴が開いたような痛みが走る。
〈私が貴方にできるのはこれくらい。
でも、今の貴方なら動かせる。今の貴方なら悲しみを伝えられる。〉
胸を抑えながら、竜宮島から送られてきた情報を読む。
（あぁ、なるほど。）
アイツが俺を通して竜宮島のコアと強制的にクロッシングした際に、俺の存在を見つけてくれたようだ。
今、アイツがアルヴィス内に残したフェストゥムを成長させて動かそうとしている。

（ありがとう。竜宮島のコア。俺を同化から解放してくれて。）
〈…ううん。ありがとうを言われる覚えはないわ。
私は貴方に酷いことをさせようとしているのよ。〉
（それでもだ。お前のおかげで動かせなかった体が、繋げられなかった体が動かせるようになったんだ。

どんな形であれ、俺に抵抗できる手段を与えてくれたんだ。感謝しかないな。）

何もできないより、何かを出来た方がいい。例えそれが自分が死ぬ道だとしても、それが良いと俺は思う。

目を閉じる。

機体の俺と更に深く繋がるように。機体の俺の指先までしっかりと。

今の俺に必要なシステムも使えるようになっている。機体の体はぎこちなくだけど、俺が動かせるようになってくる。一時的だけれども、アイツの同化から解放されたおかげだ。

（クロッシングを解除）

竜宮島のコアとのクロッシングを解除して、これ以上アイツを通してフェストゥムに情報を与えないようにする。これで送り込まれてきた情報の濁流が塞き止められて脳内もスッキリとした。

（さてと、…やりますか。）

少しばかり震え始めた体を強く掴む。

閉じた目を開けば、そこは赤い結晶の竹林ではなくて飛行機上から見た竜宮島の一

部。俺の周囲に崩れ落ちているファフナーが二機。片方はコクピットで脱出したからか遠くに、片方のファフナーにまだ生命反応はある。

（まだ治療が間に合う。さっさとここから離れなければ。）

アイツは焦った様子で操作権限を戻そうとしている。

だがしかし、俺が竜宮島のコアのおかげで同化から解放された今、俺を動かそうと動かさないと決められるのは俺だ。パイロットは俺を動かすための電池でしかない。

けれど、また同化されることもありえる。それで折角のチャンスが潰されるなんざ目も当てられない。

…最後くらいアイツと話でもしてみるか。

とても憎たらしくて忌々しい言葉を吐きやがったが、アイツがそうなったのには俺にも一因があるからな。

ふっと視界が切り替わる。機体の俺との繋がりはそのままにして、幽霊の俺を分離させてコクピット内に送る。

目の前では全裸のアイツがコクピット内で俺を操縦していた。アイツがいきなり現れた俺を見つけると顔を歪めた。

「何故お前がここに！」
「何故って…お前の同化から解放されたんだよ」
「なっ」
焦った様子に自然と笑えてくる。いい様だ。
これからやることにも驚くだろうか。…おぉ、あったあった。この機能だ。

死にたくねえなぁ

ふっと湧き出た感情を押し込めて、いつでも起動できるようにセットしておく。少し時間は多く取っておく。
それと同時にスムーズに動かせるようになった俺を島の外へ動かす。島から離れた遠く。何もない海上まで。竜宮島にまで被害が出たら嫌だしな。
「何をするつもりだ」
アイツが問い掛ける。目が心なしか怯えたように揺れている。目の模様は竜宮島のコアと同じような模様。
お前の正体は、俺の過ごしてきた記憶を合わせれば答えは導き出せた。
今、目の前にいるアイツが〝アイツ〟だって、どこかで確信している俺がいる。

「なぁ、なんで俺を同化できないと嘘を吐いたんだ」
「嘘などではない、お前に何らかの原因があって…！」

「…ま、その答えは冥土で聞かせてくれよな」

〈フェンリル、起動〉

その機械音声にアイツは顔色が青褪めていく。色を失っていく。
「今すぐやめろっ！」
「だったらお前が出ていけばいい。フェストゥムは自由に移動できるだろ？
なんで未だに移動せず、俺に乗ってんだか」
俺もあの声を聞くと一層、戻れないと感じた。だけど、これが今の俺に出来ることだ。
フェンリルは簡単に言ってしまえば自爆装置。そして、俺や他のザルヴァートル・モデルには今の俺に起きている事態の対処として、他のモデルよりも三倍ものフェンリルが搭載されている。竜宮島なんかで起動したら、竜宮島が全て吹き飛んじまうくらいの威力だな。

…機体の俺として生まれて約一か月。記憶が戻って数分くらいか？
これといって意味の無い生き方をしてたな。ただ機体の周りを浮遊して、ぐだぐだと人間に戻りたいだの泣き言ばっか吐いて努力なんざしてなかった。記憶が戻った今じゃ、どうあがいても人間に戻ることは無理だと分かるけどな。
結局、記憶が無くなっても飲んだくれのろくでなしは変わらないってことだな。
「はぁ…。死ぬ間際くらいに一杯くらいは飲みたかったなぁ。」
出来れば度数が強い日本酒。俺がコアになる前に飲みかけだった「輝夜」を飲み切りたかった。それに家にあった筈の「さぬき」も飲んでみたかったな。他には「宝貝」も美味かった。舌がピリっとして、一瞬落下死しそうになる程の衝撃だったけど、後味が意外とあっさりしていて…。
なんて考えていると、信じられないと言わんばかりにアイツが叫んだ。

「…正気か！
それは、お前の存在が消失するということだ！
何故その道を選ぶ、何故そんな道を!!」

そんな叫びに、やっぱりお前は理解できてなかったんだなと思う。中途半端に学ばせ

て、その道を選ばせてしまった。これは、俺の責任でもある。子育ては子供が一人前になるまで放り出しちゃいけないと言うだろ？少なくとも、俺はそうあの人から教わった。

「…楽な道を選んだお前には分からないだろうよ」

フェンリルを解放する時間は迫ってきている。

もうここら辺で大丈夫だろう。あまり行き過ぎて竜宮島以外の島にも被害が出たら嫌だしな。

〈フェンリル、解放〉

「やめろぉぉぉぉぉ!!!」

…視界が白く染まった。

第５話　守れたもの、失敗したもの

第一アルヴィスの医務室。
白いベットにて、抱き合う影が二つあった。
「道生っ！良かった、無事で良かった…！」
「おいおい、泣くなよ弓子。
言っただろ？生きて帰るって。」
「でも…！あのまま戦い続けていたらと思うと私、私…！」
あのまま、あの機体が道生を殺してしまうんじゃないかと出そうになった言葉を飲み込んだ。
活動限界を迎えて同化現象を起こす前に、あの機体に殺される前に、道生が生きて帰ってきてくれて良かったって心の底から思う。
そうやって泣きじゃくる私を、道生はそっと抱きしめてくれた。
…上の方から聞こえてきた、鼻をすする音は聞こえなかったことにした。
「ねぇ、道生。私ね……」

二人だけの、幸せな時間。
弓子は思い切って、自分の体に起きていることを伝えるのだった。

◇

夜中のアルヴィスの医務室。
豊かな薄茶色の髪の女性と無愛想な顔をした男性が向かい合って座っていた。
女性がデータの記載されたボートを男性に渡す。そのボートを興味深そうに男性は見つめた。
「真壁司令。例の島から解析できたデータですが…すみません。
詳しい説明は全て破壊されていて復元不可能でした。」
そこに説明文は無く、例の島から持って帰ったデータの一部を解析し、出現した単語を記述してあるだけの物であった。
しかし、そこに引っかかる単語があった。
史彦は、その単語を指でなぞった。
「リディル・モデル…これは一体。」

「はい。恐らくですが、蓬莱島はティターン・モデルに代わる新型モデルを開発していたのではないかと。」

「…そうですか。」

ティターン・モデル。竜宮島にとって苦い思い出であり、決して忘れてはならない者達が使っていたモデルだ。機体に直接ジークフリード・システムを搭載し、パイロット同士の連携を強めてフェストゥムの読心能力を防ぐことができる。

しかし、現在使用されているノートゥング・モデルよりパイロットの負担は多く、同化現象も比にならない程の早さで起きる代物であった。

史彦は瞬きをし、思考を切り替えた。

「…他にもファフナーに使用できるコアの生成技術もありますね。」

「ええ。蓬莱島が今の私達よりも高度な開発をしていたのは明確です。

医療関係のデータは復元できましたが、ファフナーに関するデータはこの有様です。」

そういって千鶴は声を暗くした。

頭を軽く振り、史彦は言った。

「いいえ、そう気を落とさないでください。貴方のお陰で、あの子たちは生きていられるのですから」

蓬莱島から得られた医療技術は先進的であった。可能な限り同化現象を抑える同化

抑制剤の改良データ。同化現象の末期症状段階での肉体の結晶化を可能な限りに抑える研究データなど。それらのデータを利用し、第一アルヴィスの医療技術を進歩させ、パイロットの生存に繋げている。

二人は暫し話した後、解散した。

◇

吹雪く北極にて、座り込む影が一つ。

「私は…何故このようなことを?」

青年はフェンリルを解放したコアと分かたれた我々と共に北極へと移動していた。

自らがあのコアと話したがった。

その事実に震えながら、青年は傍らに落ちているコアを見つめた。無機質に転がる姿

に、懐かしさを感じる僧服を着た姿は見えない。
自分自身でも理解の出来ない行為をしている。それが理解できない。
アルヴィスの子に対してこのような行為は起こさない。
それでも目の前で落ちているコアに対しては、自分が理解の出来ない行為を起こす。
…このコアの肉体はフェンリルと共に消え去ったが、核であるコアと、マークニヒトを同化した際に構造も理解した。マークニヒトの増産は容易い筈だが、何故だか増産したくないと感じている。
そう感じた事の理由すら分からずに、青年は行動を起こす。
アルヴィスの子をミールと接続させ、人類を滅ぼす戦法を学ぶために。

◇

火照るように淡く薄紅の色を反射する竹林。有象無象に生えた竹林のその一つ。中心部にある、一際大きな竹の根本に寝込む影が一つ。
笠を付けた僧服の男が寝込んでいた。
暫くすると、その男が目覚め大きく溜息を吐いた。
「まーだ、生きてんのか…」

解放されたフェンリルと共に死ぬべきであった身が、またもや竹林に存在している。自己意識が存在していることに憂鬱だと言わんばかりに項垂れた。項垂れた際に、一つに結ばれた黒髪が垂れて首を擽った。

通常、ファフナーに人の遺志は残らない。それでも何故か、俺は未だに生きている。遺志を持った、意思を持っている。

だからこそ、フェンリルを解放する道を選んだ。俺と諸共、あの可哀想で、純粋であったコアを消し去るために。

しかし、この現状は何だ。

片手で顔を覆った。失敗だ。これは失敗した。竜宮島に伝えられた意思も成し遂げられなかった。

（酷い失敗だ。これでまた、フェストゥムに余計な物を学ばせてしまった感が強い。）

とはいえ、俺にフェストゥムと会話する能力はない。竜宮島のコアの言ったことなんて半ば無理なことだった。

「フェストゥムに悲しみを伝えろとかさぁ…。

俺には自爆一択しかないのになぁ…」

無理言ってくれるぜ。
つらつらと自分のやってきたことを思い返せば返す程、後悔が募るばかり。
それでも、ふっとした瞬間にあの人の言葉が浮かんでくる。

どれが答えかも分からない。それが人生である。
何も整備されていない道を進む。迷い続けて進む道である。

そのようなことをあの人は言っていた。

青年は覆った片手を戻し、体を立ち上がらせる。

「どこにも無いのに、探すしか無くて、進むしか無いのかよ」

身長を軽く超す竹林を、歩く影が一つ。

第6話 ”私”はここにいる

来るべき北極での戦い。

我々はフェンリルによって消滅したマークニヒトの機体を一つだけ再構築し、我々がその機体に搭乗していた。

我々のミールが空と繋がる為の準備が整い、空を飛ぶ人類を、ファフナーに乗る人類を殲滅していく。

「効果的に部隊を入れ替え、敵の主力を誘き出し各個撃破」

「最小限の犠牲で敵を倒す」

「犠牲を考慮し、敵を倒す」

アルヴィスの子の思考を理解し、人類から学んだ憎しみで数多の人類を殲滅していく。

しかし、何処かに違和感を感じる。胸、足、腕…様々な場所に小さな違和感を感じている。

アルヴィスの子らが、入れる筈の無い内部に侵入し始めた。

目の前のアルヴィスの子に撃退の方法を教えさせた。

「連携を分断し、各個撃破」
「防衛すると見せかけて誘き寄せ、犠牲を払って分断」
早速その戦法を使った。ファフナーの一機を我々によって近くの池に沈めさせ、救助に走る子らを分断することに成功した。
その筈なのに、分断した子らはまた集結し我々を傷付ける。
「なんだ……。
これは、なんなのだっ」
小さな違和感は、感じたことのないものへと。いや、何処かで感じたことのある、懐かしい感覚。
「それが痛みだ、フェストゥム！」
痛み…？これが、痛み。痛みだ。
これは、痛みだ。

〝私〟がかつて…捨てたものだ。

橙色のファフナーがニヒトの腹にルガーランスを突き刺した。

腹部に走る、鋭い痛み。

「フェストゥム！教えてやる、僕がお前たちに教えた戦い方の名を！

消耗戦だ！

痛みに耐えて戦う戦法だ！」

緑色の機体が背中を刺す。

背中に刺激が走る。耐えられない、耐えられない!!

「それが戦いの痛みだ。

存在することの苦しみだ。

いなくなることへの恐怖だ！フェストゥム！」

痛い、痛い、痛い！
苦しい、痛い、苦しい、痛い!!

捨てた物が、あの日に捨てた物が返ってきた。

痛い、怖い、苦しい！
この場から、痛みを与える物から逃げたい！
ホーミングレーザーを放射し、アルヴィスの子らの足止めをするっ！

「戻せ。私を…無へ、戻せぇぇぇ！」

口から出た、言葉。
ワームスフィアを使い、この場から逃げ出した。
息が絶え間なく出る。胸が、激しく動いている。

痛みから逃げられた。

生きている。痛みから逃れて…生きている。

「生きていることに感謝したな。
それが今ここにいることの喜びだ、フェストゥム…」

喜び？

生きている。
我々は。

いや、我々じゃない。

「〝私〟は…今、ここにいる。」

生きている。苦しみを感じる。痛みを感じる。あの日にむせ返る程感じた感覚が蘇っている。
島を抉られるのは、内臓を切り取られるような痛みだった。島民が死んでいくのが、

とても胸が苦しかった。あの場から一切動けず彼を死地へ向かわせた自分が嫌だった。
だから逃げた。唯一の逃げ場すら、私で潰してしまった。
そんな私が取った行動は更なる逃亡だった。
存在に、苦しみと痛みに耐えられなかった”私”は同化された筈だが、アルヴィスの子によって教えられた痛みが、苦しみが再び”私”を引き戻した。

”私”を”私”にした。

…かつて蓬莱島と呼ばれた島のコアだった私は、苦しみに耐えられずフェストゥムの道を選んだ。その際に、瀬戸内海、…蓬莱島のミールも同化された筈だ。
しかし、同化されて尚蓬莱島のミールは存在を保っていた。同化されていなかった。いや、同化を拒んでいた。
そして、私が同化されても蓬莱島のミールとの繋がりは途切れていなかった。今の”私”になら分かる。

”私”は両方のミールと繋がっていた。

そして、蓬莱島のミールが私という端末を通して北極のミールから情報を得て、着々と彼を目覚めさせる準備を整えていた。いや、もう恐らくは目覚めている。今はまだ寝ぼけているのか。

それでも蓬莱島のミールから戻れと呼ばれている。このまま拒否し続けていても強制的に戻されるだろう。

戻された私にミールが望むことなんて、もう伝わっている。

私は…まだ彼と話していたかったと感じている。

閉じた瞼に浮かぶのはいつも疲れたような顔をして、私が強請った昔話を柔らかな笑顔で話す彼だ。

何も知らなかった、知識を与えられなかった私にとって、彼の話はとても興味深い物だった。あの時間が私に心を持たせ、その心を震わせる程に、また望んでしまう程に楽しかった。

あの襲撃さえなければ、今頃も話せていただろうか。

…いや、それは無理な話か。彼もいずれはあのモデルに乗り、私の前に現れることも無くなっただろう。

呼吸を深く、とても深くした。

眼前に移る北極のミールと人間たちの大きな戦い。

…自分も共に引き起こしたことだが、きっと私が形を持ってここにいられる時間は少ない。

北極のミールとフェストゥム、人類たちには申し訳なく思うが…。

最後くらい、自分のやりたいことをやっても良いだろうか。

きっと許されないだろうが、それでも構わない。いくらでも憎んでくれたっていい。

きっと君達にはその権利がある。私には憎まれる権利がある。

それでも、私は自分のやりたいことを優先した。きっと、彼が見れば悪い子と言うのだろうか。

心に深く繋がる、懐かしき風を感じるミールの元へ。

何度も強請った話の風情を思わす景色へ。

”私”が”私”である内に、伝えたい。
私が君に貰ったものへの感謝を。
…これから君が知る真実はとても残酷な物だろうから。
少しでも、助けになりたい。今度こそ、彼と共にいたい。

◇

フェンリル解放後から、一切機体の俺との繋がりは戻せなかった。
恐らく肉体だけはフェンリルに巻き込めたが、本体であるコアはアイツが移動させたのかもしれない。
どうあれ、俺の意識がこのヘンテコな竹林にあるということは、自爆作戦は失敗したということだ。はぁ…。
起きた時の俺は、周りの竹よりも一際太く高い竹の所で凭れかかっていたようだった。…この竹だけは赤くないな。嫌な鶸色だ。

（でも感触は結晶なんだな…。）

…それはともかく、本格的に外がどうなっているか分からない俺はまたもや竹林で迷い込んで反省会がてら歩いていた。何処行っても身の丈超える竹、竹、竹…。

本当にこの竹なんなんだよ。まったく分からない。軽く殴ってみてもこちらの拳が痛みに腫れるだけでビクともしない。見た感じは結晶で構成されている様だが、中身は違う気がする。竹の様に中身が空洞ではなくて、もっといろいろな物を詰め込まれているような。

開ければ正体は分かるけど、出来れば開けたくないこの微妙な気持ち。

コツと軽く頭を殴られるような衝撃。

何だ？と思いきや、上から結晶の粉が降りかけられたらしい。笠からぱらぱらと光を反射した結晶の粉が落ちてくる。

頭を大きく振って笠に被った粉を振り落とす。

何だと上を見れば、そこには満月。欠けも穴も無い。白く光る球体だ。

いつも島で見ていた物よりもはっきりと鮮やかでいて、大きい。

（…はぁ？ここに月なんてあったか？）

あんな満月、串刺しにされた時には見えていなかった筈だ。集中してたから見えてな

かったのか…？
なんて、空を眺めていれば目の前の空間が揺れて一人の男の姿が現れた。
作られた月を背にした、跳ねた茶髪の青年。

アイツだ。

蓬莱島のコアが来やがった。

「私は、君と話がしたい」
そう言って見つめる眼差しは、あの時の様に無機質ではなかった。
目と目が合う。…懐かしさを感じる。赤い培養液に入れられたおかっぱの少年。
それが今や成長して目の前にいる。
「…その言い草だと、お前は思い出したのか？」
「あぁ。思い出した。そして、またこちらに引き戻されたようだ。
…久しぶりだな、”さかき”」
コアは、空中からゆっくりと地面に降り立った。
さかき。さかき。さかき。…榊？

あぁ。それは俺の名前だった。暫く呼ばれてなかったし、その名前すら忘れていたから反応が遅れた。
「私はかのアルヴィスの子によって送られた祝福により、〝私〟を思い出した。」
「はぁ…。今まで接してきたお前と、今目の前にいるお前は違うってことか？」
「いいや。どちらも私だ。
…私は苦しみから逃げたのだ。逃げて、フェストゥムと同化し、苦しみを忘れる道を選んだのだ。」
フェストゥムと同化して苦しみを忘れる。苦しみという概念を知らない自分になる道を選んだってことか。
「…あぁ。それで？」
「同化へと逃げた私だが、蓬莱島のミールと未だに繋がっていた。」
「…確か蓬莱島で分けられたミールとお前は繋がっていたんじゃないのか？
お前が同化されたらそのミールだって同化される筈だと思うんだが。」
そう本人が言っていたことを思い出す。
ミールと自分は繋がっている、自分を通してミールは学んでいるのだと。
「蓬莱島のミールは静かに進化していたのだ。…自らが許可したもの以外の同化を拒否するように進化させた人物がいる。

その人物がミールと接触し繋がった。
様々な知識を与え、その人物がミールと言っても過言では無い程に繋がり、私という端末を通して北極のミールから情報を得ていた。」

こちらを見つめていたコアはふっと視線を下にやりながら、声を落として言った。

「私はもうあの人物にとって用済みの端末らしい。
もうすぐ私は、蓬莱島のミールと同化するだろう。」

「…用済みの、端末？同化するだって？」

力無く、コアは頷いた。
「蓬莱島のミールが、そろそろ目覚める。
完全に目覚めて形を取り君に接触するだろう。
その前に私はミールと同化される。
お願いだ。〝さかき〟
私を君に同化させる許可を、与えてくれ。」

お前を用済みと判断した人物がいて。
もうすぐコアはミールと同化する。でも、俺と同化したいって？

「お前はまた逃げる道を選ぶのか？」
「…もう逃げないと決めた。
ミールと同化すれば、私は君を傷付ける行いに加担してしまう。
ならば、君の傍で戦いたい。君を傷付けるような存在になりたくはないのだ。」

細い薄緑色の目が俺を射抜いている。
…強い目だ。あの人もしていた。決して曲げない遺志の強さを嫌でも感じさせる目。
どうして俺はそんな目をよく見る、いやさせてしまうのだと、思ってしまう。感じてしまう眼差し。
自分の道を選んだ者の目。

もう、コアがこの場からいなくなるのは決定事項なんだろう。
コアは用済みの端末としてミールに同化される。

…何も情が無いって言ったら嘘になる。
あの島で過ごすことが凄く苦痛だった。命を石へと加工されるのを待つだけの日々だった。
そんな中で出会ったコア。
何も動かなかった表情が、徐々に動き始めて、最終的には毎日毎日話を強請るようになっていく。
嬉しそうに笑顔を浮かべて話をしろと言われるのは嫌じゃなかった。その時だけは俺も生きていたような心地がしていた。…苦痛を忘れられた。
「私は君から様々なことを教えてもらった。
興味深い昔の人間が考えた物語を。
他者と意思を疎通できることの喜びを。
誰かを守りたいと思う気持ちを。
大切な人がいなくなることの辛さを。」
コアの体が薄く、金色に光る粒子となって空へと昇っていく。

悲し気な色を宿してこちらを見つめている。
それに胸が苦しくなる。痛い。他者と繋がるのはこんなにも辛いことだった。
誰かを失うことは辛い、痛い。そんなの、あの人でよく知っていたのに。

ああもう、分かったよ。

「…いいぜ。同化するなら、お前を用済みと判断するようないけ好かないミールよりも、俺にしな。」

そう言えば、驚きに満ちた顔をして、泣きそうな顔で近付いた。

「今度は私が…。君が私を守ってくれたように、私が君を守る。」

そっと背中に腕を回される。俺もコアの背中に腕を回して抱き合った。
意外と俺よりも身長が高いことに気が付いた。

「大きいな、お前。」
「…命とは暖かいのだな、〝さかき〟」

空へと昇る金色の粒子が流れ込むのを感じる。
目の前で体が透けて、微笑むお前の顔が見えた。
悲しいけれど、存在が消えてしまうのは怖いけれど、自分は俺の中に生きているのだと。
回した腕の中に体は無く、然し心は俺の中にあるのを感じる。

ありがとう〝さかき〟。私を〝私〟にしてくれて。

第７話　浮かれポンチ

薄らと中に入っていったコアのおかげか、内側がほんのりと暖かくなった感覚がする。

俺の内側に確かにいる、存在している暖かさ。

確かにお前はここにいるんだ。

そっと胸の辺りに手を寄せれば、いつもより暖かさがあった。

〈ふあぁ……。ああもう…。〉

竹林に声が響く。青年と少年の間のような声だ。

そして、胸がやけにどくどくと激しく動くのは何故だ？

〈まったくもって不愉快なことをしてくれたね。〉

いや、激しく動く理由は底知れない苛立ちだ。この顔も知らない声の主を、何故か俺は嫌がっている…？

〈北極のミールは個体を学んでしまったようだし…。
あのミールに同化されちゃたまんないって思って用済みの端末を同化しようとしたのに…。
とんだことをしでかしてくれたね！
…今日から君を端末にするから、ここから出てった出てった！〉

凄く、物凄く。
殴りたくなるこの気持ちは何だろな。

〈詳しい説明は後。人類軍に解剖されてもいいの？〉

ゴンっと強く殴られたように意識を塗り替えられた。

ここは…俺の中のコクピットか。いつの間にか座っているし。
何だよあの声…。もしかしてアレがコアの言っていた蓬莱島のミールか？随分と勝手な奴だな…。

それでもあの空間から抜け出せたのは好都合だ。機体の俺とも同期したかったし、アレについては置いておこう。
…この赤いゼリーみたいな場所に突っ込めば手っ取り早く機体の俺と同期できるか？
中々に粘着性の高いゼリーの中で、あまり進まない指を必死で進めてニーベルング・システムの指輪に指を突っ込む。指の根元までしっかりと入れてから握る。
神経が繋がっていく。あの時の感覚が戻ってきた。…良かった。
なんて安心しているのも束の間。

機体の俺の視界では、周囲が人類軍のファフナーに取り囲まれていた。

「…解剖ってそういうことか。」

アレの言うとおりになるのも癪だが、解剖やら何やらをされそうになるのも嫌だ。
両翼の調子は良好。指も細かく動かせる。推進ユニットの調子も良さそうだ。
北極だからかほんのりと肌寒さを感じる。
どちらが先に動くか分からず緊迫している空間。
じり、じりと少しずつ距離を詰めてくる人類軍のファフナー。
「そんなにゆっくりなら好都合だな。」
推進ユニットを起動させて一気に上空へ飛ぶ。
上空に逃げてから、どちらに逃げるか。とりあえずは戦闘機の影の見えない西側にでも行くか。
待てよと言わんばかりに人類軍のファフナーが追いかけてくるが、あのグノーシス・モデルの速度はそんなに早くない。俺と同等に飛ばしたら同化現象で人がコロコロ死ぬだろう。
だからあちらは見送るしかない…と思いたい。
ちらりと後ろを見れば飛ぼうとしているグノーシス・モデルを抑えているグノーシス・モデルの姿があった。
あれなら当分は追って来れないか。

「…それにしても。」

見下ろした自分の体。どこも透けていない。しっかりと肉感を持った腕。

「いつの間に肉体が戻ったんだろうか…？」

ニーベルング・システムから手を離して見つめた手は、しっかりと皺も指紋もあった。

恐らくだが、こうなった理由はコアと同化した時か、あの腹立つ声とかに呼ばれた時だろうか。あれくらいしか思い当たる節が無い。

片方の手も接続を解除する。というか、突っ込まなくても俺の体だから操縦できる。

ふむ…と腕を組んで考えていても、分からない事が多い。さっきのコアの話に出てきたミールを進化させた人物とか、あの腹立つ声の北極のミールが個を学んだとか。

一斉に色々なことが起き過ぎて処理しきれない。

…いや、これから時間はあるからゆっくり考えていけばいいか。

今はコアが俺の内に存在している。それだけを知っていればいい。

「…青い空だ。」

ふと顔を見上げれば空を高速で過ぎる光景。

こんなにも綺麗に見えただろうか。

蓬莱島で見た空や海も綺麗だったが、あれは地上から見上げていたようなものだったし。今のような空を自由に飛び回れるのは中々ないことだって今更ながらに気付いた。

まぁ…最初の時なんて記憶が無くて焦ってたし、戻れない筈の人間に戻りたがっていたし、コアに機体を奪われるわでまともに空を見ていられる時間なんて無かったか。

…こんな全て見透かしたような青さが広がる空を見ていなかったなんてもったいなかったな。

所々に掛かる白い雲もいい。快晴の空もいいが、雲の掛かった空だっていい。

潮の匂いだって好きだ。あの空気を感じさせない景色が好きだった。

胸に広がる抑圧から放たれたような感覚。ずっと重い荷物が背に乗っかって息苦しく生きていたような日々。

「そうか。今の俺は自由なんだ。」

自由。噛み締めれば噛み締める程、意味を帯びてくる。体が軽くなったような感覚、背にあった荷物がごろりごろりと大量に落ちて軽くなって、鈍く霧のかかった心が

さぁっと晴れていくようなこの解放感。
口元が緩む。いつも死んでいるような目も輝きを放ち始めるようなこの心地。

「楽しい！」

まるで酒を初めて飲んだ時のような感覚。コアと過ごす時間も楽しかったが、何だろう。解放感の違いって奴か。
全て煩わしい物が外れたような感覚。体が自然と動き出してしまうほどに今の俺は自由を謳歌している！
凄い。なんて凄いんだ。自由って。解放って！これで後は傍に酒があれば文句なし！好きに酔って酔いまくって綺麗な青空を飛び回り、風を全身に感じ、潮の匂いを胸いっぱいに吸い込むなんて出来たらもっと良い気がする！

「凄いぞコア！物語でしか知らなかった自由って、こんなにも凄かったんだな！」

心なしか内側も呼応するように暖かい。
そうか、嬉しいか！

「俺も嬉しいぜ！」

テンションに任せたまま飛んでいたら疲れた。最初は空を飛び回っていたのに、段々辛くなって低空飛行になっていった。もう手に海面が当たるレベルだ。

そういや、まともに飛んだことなんて無かったか。大体フェストゥムの無？とやらを繋いでやる瞬間移動だった。

このままだと海に落ちそうだ。何処か休める場所でも無いか。出来れば人類軍基地とフェストゥムがいない場所が好ましい。

「…もう限界だ。」

推進ユニットを動かし続けて飛行し続けるのも限界だ。いや推進ユニット自体に不調は無いが、こちらの疲労度の問題だ。このままだと海に落ちるが…。ザルヴァートル・モデルは海に入っても錆びたりはしない…筈だ。

ザバンと大きな飛沫を上げて俺は海に落ちた。

…笑い話になりそうなくらいの失態だ。

冷たい。

でも気持ちがいい。このまま落ちていくのもいいかもしれない。

「何か色々と外れている気がする。」

楽しい。嬉しい。気持ちいい。

傍らに酒があればもっと良い。

「浮かれている、か。」

何でこんなにも浮かれているのか。

初めて酒を飲んだ時以来のような、酔っている感じなんだろう。

そう。子供の頃、初めて寺にあった酒を飲んだ時。舌が痺れているのにどこか幸せだった、何でもかんでも幸せに思えたあの一瞬。くらくらと回る視界もあの人の驚いて叱る声も体が倒れて横になった時だって心から笑えて幸せだった。

「なんでだろうなぁ…」

よく考えても分からんな。自由になって浮かれている、ということにしておこう。

目の前で泳ぐ魚だって突然落ちてきた異物に驚きはするがそのまま泳ぎ去っていく。

どうでもいいことだ。

魚かぁ…。暫く魚料理を食べていなかったな。ヤケクソで肉ばっかり食べていた。クソ刈間からは「修行僧がこんなことしてていいのか」なんて言われたけど俺はもうとっくに戒律を破っている。修行僧じゃない。だから好き勝手に暮らした。酒は一日一升は飲んで、日によって肉料理や魚料理を作ったりしては食って、たまに来る法要の仕事だけやってふらふらと島内を歩き回ってはコアに昔話をする。

ははっ。本当に碌でもねぇ奴。

それに今は石が本体の非人間。死んだらどこに行くんだか。

「ん…あの金色の物体って…。」

視界に見えた金色の物体をピックアップする。

魚？魚にしては大きいような気がするし、調理できそうにも…って。

「あれってフェストゥムじゃないのか…？」

そう呟いた瞬間にそれが勢いよくこちらへ泳ぎ始めた。

…やっぱフェストゥムじゃねぇか！あんな形の魚見た事ないぞ。

ぐだぐだしてる場合じゃない、戦闘態勢にならないと。

疲れも先程よりは無くなった、推進ユニットも動かせる。

しかし手元に武器が無いな。アンカーユニットとレーザーだけで何とか対処できるか…？いや水中でレーザーは扱えるか…？

というか海中戦なんて出来るか？いや、やってみるしか無いってか。
フェストゥムは徐々に大きさを増してこちらに来ている。
「海中にフェストゥムがいるなんてな…」
確か海中でフェストゥムの存在は無かった気がするんだが、これもフェストゥムの進化って奴か。
空や通信はフェストゥムに探知されるってことから潜水艦やらアルヴィスの艦隊が出来たというのに。海中から攻撃できるって、人類を足元から崩せるようなタイプじゃねぇか。

しかも…デカすぎる。

視界一杯に広がる金色の体に、大きく裂けた口らしき部分。丸呑みしてから同化するって感じか。
こんなデカい図体でどれだけの物を同化してきたんだか。
少し冷や汗が出てくる。体も震えてくる。
まともにフェストゥムと対峙したことなんてあのモデルに乗った時くらいだった。
「震えてんじゃねぇよ、俺。」

俺はザルヴァートル・モデル、他の機体よりも強い性能を持った兵器だ。
しかも俺はザルヴァートル・モデルの中でも攻撃力に特化したモデルだ。一匹でも多くのフェストゥムを殺す。そんなコンセプトの元に誕生した俺。
「そんな俺がただの金色に光るだけの魚に負けるかって言う話だ。」

「来いよフェストゥム!」

その呼びかけが聞こえ、まるで応えるように口をゆっくりと大きく開き俺を飲み込もうとする。

ことは無かった。

◇

「そうですか…。あのザルヴァートル・モデルが金色に光った後に自律的に動いた、と。」
ワイングラスを傍らに置き、老女は画面前に映る右目を失った男にそう呟いた。
「はい。そのような報告が上がっておりますが…。
…如何なさいますか。」
「ザルヴァートル・モデル、マークニヒトを捕らえなさい。

もうじきプロメテウスの岩戸と衛星の同期が済む頃です。ザルヴァートル・モデルの位置情報は逐一渡しましょう。

頼みましたよ、バーンズ将軍。」

「…了解。」

プツンと回線は切られた。

「ミツヒロ・バートランドの残したザルヴァートル・モデル…。敵に同化されていなければ良いのですが。」

ワイングラスを持ち、ゆらりと赤き葡萄酒が揺れる。

その水面は好戦的な老女の目を映していた。

「貴方が残したものは有効的に使わせてもらいますよ、ミツヒロ。

ザルヴァ―トル・モデルも、…娘もね。」

全ては本当の平和のために、ね。

第８話　異文化交流

　目の前にいるフェストゥムはあの口を広げることなく、同化現象もワームスフィア現象も起こすことはなくただ俺の周りを泳いでいた。あのフェストゥムが一切の敵対行動をせずに、ただじっくりとこちらを見つめながら周囲に漂っているというのは凄く…気分が落ち着かない。

（どうするんだ…これは、攻撃すべきなのか？）

　攻撃さえしてこなければ人類だってフェストゥムだってどうでもいいんだが…、しかしいつまでもこの状況を保っていられるというか、いつ襲われるかも分からない。ここで俺が敵対行動をすれば、相手だって敵対行動をしてくるかもしれない。一応疲労が抜けたとはいえ、無駄な労力は避けたい。

（一体なんなんだ…このフェストゥム……。）

　俺が上に動けばフェストゥムも上に動く。右に動けば…。といった状態で確実に向かった先がたまたま同じだった、なんてことではない。多分だが、俺に付いてきている…？

（こういった時にフェストゥムと会話出来ればいいんだがなぁ…。）

フェストゥムの言語はフェストゥムでしか分からないのだろう。竜宮島のコアや、俺の内側にいるコアだって半分はフェストゥムらしい。俺は以前、竜宮島のコアに同じ存在だと言われたが厳密には違うだろう。

人工的に作られたフェストゥムの核のようなものだ。人とフェストゥムの両方と意思疎通が出来て、ミールに影響力を与えるような存在とはまったく違う。どこまでも凡庸な存在だ。

（うっ。

…急に腕に衝撃が。）

そう思って腕を見れば、俺の腕に先っぽだけ噛みつくフェストゥムがいた。

（うっ、嘘だろ。こんな悶々と考えてたから出遅れた…！）

すぐさま攻撃態勢に移ろうとしたが、フェストゥムが腕を引っ張っていき、ぐんぐんと上昇させられていく。不味い、主導権を握られている。どうやって奪回すれば…って。

（…？海上戦が得意な筈なのに陸へ行こうとしている？）

突然起こったフェストゥムの奇行によって、俺は海から陸へ移動させられた。

大きな水飛沫が飛び散りながら、俺は空を見上げる姿勢になっていた。俺の腕を引っ張り上げて陸へ移動させたフェストゥムのことも一瞬忘れて、その光景を見ていた。

玉のような飛沫によって輝いて見えた空は、また別の魅力があった。
ハッとしてから未だに腕に噛みつくフェストゥムを見た。するり、とそのフェストゥムは噛んでいた腕を離してこちらを見ていた。心なしか、つぶらな目まで見えてきてこちらを見つめているような気さえする。
「お前…本当に何がしたいんだ?」
こちらの言っていることが分かるように掌にグロテスクな口を擦り付ける。…意外とフェストゥムの表面はつるつるとしていた。
…いや、それよりもこのフェストゥムのフェストゥムらしからぬ行動を見て、このフェストゥムで悩んでいることが馬鹿らしくなってきた。
はぁ、と溜息を吐いて冷たい海面を出た。動作に異常の無さそうな推進ユニットを動かして空を滑空すると、後ろの方であのフェストゥムが付いてきているのが分かる。
「旅は道連れ…って言ってもなぁ。」
その言葉を言った人も、まさか地球外生命体にも通用するとは思わなかっただろ。

あのフェストゥムに名前を付けることにした。あの形状から、昔蓬莱島の図書館で見たクジラという生物に近いからクジラと名付けた。

あの後もクジラは俺の後を付いてくるようだった。

やっと見つけた人のいなさそうな島に着いた時でも砂浜にその大きな巨体を乗せて隣にいる。今もそんな状況だ。時折あのグロテスクな口が開くのは恐ろしいが、大抵は甘噛みで同化したりはしない。本当に謎のフェストゥムだ。

うわ、ちょっと翼を噛むな噛むな。微妙に痛いんだぞ。

強めに口を押して戻せば少し大きさが萎んでいるような錯覚もしてくる。まるで人間のように表情や心があるみたいな行動だ。

（いや、もしかしてだが。）

まじまじと隣の巨体を見上げると、クジラは迷いなく頭を噛んできた。そのままもみもみと口を動かして、徐々に口に付いた歯で削られるような痛み。…俺が、少しの傷は周囲の微生物を同化して治していくザルヴァートル・モデルでなければ今頃終わっていたな。もう何十回目もこんなことを繰り返している。

もしや、新たなフェストゥムの侵略方法なのではとも思ったが、段々アホ面に見えてきたクジラを見るとそんな考えは雲散霧消した。考えるのがアホらしくなるほど、このクジラというフェストゥムは今まで見てきたフェストゥムと違いすぎた。

（やっぱ無い。そんなことは無い筈だ…！）

一瞬でも考えたことを捨てて、クジラの甘噛みから脱出する。毎回視界の上部が赤黒く血液の様に脈動しているフェストゥムの内部を見せられる気分になって欲しい。しかも今は夜中だ。とっくに寝られるような体ではないがとにかく心臓には悪い。

クジラから少し離れた場所に座る。

…クジラは目敏く、距離を詰めながら転がってきた。

「お前、陸でも大丈夫なんだな…。」

何か言ったか、と言わんばかりに巨体を揺らす。そして砂埃が立ち、近くにいる俺の目や鼻に入る。

「何でもねぇよ」

暫くはその島で一人と二体で空の月を眺めていた。

あの空間のように、作り物ではない。太陽の光を受けて輝く月を見つめていた。

〈ちょっと!?何やってんの?何でフェストゥムといる訳?〉

…あの腹立つ声だ。まだ聞こえたのか。

〈まだってねぇ…。君は僕に情報を知らせる端末だよ?まだも何も、君が死にそうになるまでは使うからね。〉

あぁなるほど…。
つまりここで自害すればお前の声は聞こえなくなると。
〈そんなことさせる訳ないでしょ。
というか、そんな簡単に自害するなんて言っていいのかな？前の端末のことは考えてないの？〉

……。
…それくらい、お前の声や言動、存在が不快だって感じているんだ。さっさと出ていってくれ。
〈ちぇっ。なんでそんなに嫌うんだか。
ま、精々色々な情報を持ってきてよね。僕らのためにさ。〉
そう言って、声は途切れた。

あの声に情報を知らせる端末、声に出さずとも何故か会話が続く、情報は僕らのために。

そういや、フェストゥム以外でも謎はあったな。

あの腹立だしい声…もとい、蓬莱島のミールのコアはコアだった筈だが、あの声の主は一体何なのだろうか。コアのように島を維持していたのか、コア以外にもコアがいたのか。

世の中、何もかもが分からないことばかりだ。

まったく、これが兄だったなら解けるのだろうな。

夜が明けていくのが見えた。暗い空が徐々に明るく、色を取り戻していく。

お前は寝れるのかよ、という言葉を飲み込みながら盛大な鼾をかいていたクジラを小突いて起こす。

しかし寝起きが悪いようで何度も小突いていく。

…。

それでも起きなかったので平手打ちをしたら起きた。

不服そうな顔をしているが、俺に付いてくるっていうんならここに置いておくのもなんだか気分が悪い。

…何より、旅は大勢で行った方がいいと思う。ぶらぶらと散歩するのも一体のが嬉しい時もあるが、たまに人寂しくなることもある。面倒くさい人間の心理と俺の考えだけど、話が合うなら人でなくてもいい。多分言葉が伝わらなくても、ある程度のことは伝わっている。

「ぐぉぉぉぉ…」

あくびのような音を立てながらクジラは数回体を揺らして海に入っていった。しかし陸では身動きが取れないも同然なので、クジラの体格が入る深さまで俺が体を押して海に入らせる。意外と軽く押すのは簡単だ。

ゆっくりと入ってゆき、クジラが泳げるようになったのを確認したら、俺もある程度の汚れを同化してエンジンの動力に回す。クジラが鼾をかくのと寝相が悪いことで、砂埃が酷く舞って機体に大量に積もっていたからな。

「行くぞ、コア、クジラ」

推進ユニットを使い、どこへ行くかも分からない道を一人と二体で行く。

一体だった時よりかは、心も足も軽い道のりだ。

第9話　思い出してからは

いつものように海面を滑空し、宛先の無い道を行く中で気になることがあった。

（上空から視線を感じる。）

気のせいなのか、上を見ても空を飛ぶ鳥と太陽しか見えない。最初は鳥が見ているのだろうと思っていたが、その鳥が離れていった後も奇妙な視線を感じたままだった。

急に足を止めた俺に気付いたのか、足元の方でクジラが突いてくる。

何故か落ち着かない。

ピピッ

何だ。急に現在地周辺のマップが現れた。確か、緑の丸が俺の反応で、赤い丸はフェストゥム、水色の丸がファフナーの反応だ。そのマップでは、俺の後ろから三つの水色の丸が追いかけてきているのが見えた。

（まさかっ！）

後ろを見れば人類軍のファフナーが三機。それぞれに銃を持っている。

そして、こちらに銃口を向けながら移動してきている。あの様子だと、射程距離内に入れば撃たれることは確実だ。

…応戦するか？
だが、それで人が死んでしまったら？
可能な限り人は殺したくない。人を殺すことに慣れたくはない。
いや、応戦せずともこのまま逃げるというのも有りか。グノーシス・モデルのエンジンはザルヴァートル・モデルの物とは違い、動力に限りがある。
…あのファフナーの動力切れを狙ってみるか。
（すまんなクジラ、ちょっと飛ばすぞ。）
進んでいた方向に向き直り、先程よりも強い出力で推進ユニットを動作させる。スピードも段違いで少し酔いそうになるが、振り切れるまでは我慢だ。
（頼むから、追いかけてこないでくれ。）
「はぁっ。はぁっ。」

息切れをするほどに飛ばしたが、人類軍のファフナーは一応振り切れたようだ。少し遅れてクジラも追いついてきた。

「一体何だったんだ…。」

元から道など気にしてはいないが、何かに追われるというのは気分が悪い。未だにまだ追いかけられているのではないかと感じてしまう。

…いいや、大丈夫だ。もう大丈夫だ。流石にあの距離まで行けば動力切れする筈だ。その筈なのに、未だに視線を感じる。肩から力を抜きたくとも抜けない。

上から見られている。

見ても、星が見えるただの夜空だ。

何故こんなにも嫌な予感が止まらないんだ。

ピピッ

突然現れたマップ。

５つの水色の丸。俺を囲むように水色の丸が展開されている。

まるで、待っていたと言わんばかりのタイミングだ。

後ろを向いても、前を向いても遠くの方で人類軍のファフナーが見える。こんなに暗くてもはっきりと小さな輪郭が見える。

どうすればいい。このまま逃げ続けても、この状態を切り抜けても人類軍に追い詰められるのか？

なぜ急に追ってくる？なぜ位置を追跡できる？

疑問ばかりが浮かんでくる。肝心の対応策は出てこない。こう考えている間にも人類軍はすぐやってくる。

咄嗟に出てきた自分の言葉に引っかかる。

すぐやってくる？

…疑問の種がすぐそこにやってくるなら、聞けばいいじゃないか。逃げるのは止めだ。

五機だと通信を繋いでいる間に俺が捕らえられたり攻撃されたりする危険もある。

なら、一機くらい残して後は足を潰すくらいで大丈夫だろうか。いや、武装も剥いでおかないと反撃されるか。

「よし。決まったぞ。」

人類軍に直接聞く。ああでも、クジラはどうしようか。

何となくクジラを巻き込みたくはない。

というか、今の状況でフェストゥムが出てくれば人類軍とまともに話が出来なさそうな気がする。

機体を海に潜らせてクジラの近くに行く。クジラは何だ、と口をこちらに向けた。

「お前が言葉を理解できるかは分からないが、今は下の方に潜っていてくれないか。」

ジェスチャーでも伝わるか分からないが、一応指で下を指差す。

クジラはあくまでもフェストゥムだ。読心能力だって使えそうだが、言葉の意味までは理解できないかもしれない。いや、フェストゥムの内情なんて知らないが。

暫くしてからクジラは深く潜っていった。

「なんとか伝わった…のか？」

クジラの姿を背に海中を上昇していく。マップを見れば反応はすぐ近くに来ていた。

このまま浮かべば恐らく持っているであろう銃で蜂の巣にされるだろう。海面から見える人類軍はきょろきょろと辺りを探している様子だった。…あいつら、位置は分かるが、高低差までは分からないのか？

（なんなら、今がチャンスか。）

すぐ傍に見える人類軍のファフナーの足を同化ケーブルで引っ掛けることにする。

がくり、と突然姿勢を崩し海へ沈んでいく仲間に動揺するも、まだ海の中にいるとは気付いてはいない様子だ。

素早くケーブルを引いて俺の手前にまでファフナーを動かして無防備に出された足を掴んで握る。まるで豆腐のような柔らかさで簡単に足は壊せた。それから手に持っている銃を奪い取る。よし、これで大丈夫だろうか。

一連の作業を終えたらそのファフナーを海面上に浮かせる。ぷかりと泡の様に無惨な姿になったファフナーを浮かせた。溺死はさせてはいけない。

（やっぱり気付くか…。）

それによって、俺が海中にいることを悟られたがやることは変わらない。敵の無力化と意思の疎通を図る。

今度は四本のケーブルを同時に射出して、先程のように海に沈める。こちらを狙って銃を撃ってくるが錯乱しているのか、的外れな射撃ばかりで避けるのは簡単だ。足を潰し、銃を奪い、海に四機浮かせた。

それから海から出て適当な一機に同化ケーブルを指す。

これで俺と相手のファフナーとで通信が出来る筈だ。

「なんだっ、勝手に通信が…！」

「お前たちは何故俺を追いかける？」

単刀直入に言えば、ぐっと喉を詰まらせたような音が聞こえる。

「俺にお前たち新国連と敵対する意思は無い。追いかけるのを止めてくれないか。」

「…それは出来ない。俺達にはお前が乗っているザルヴァートル・モデルの回収を任されている。」
「なるほど。では、この機体を渡すとして何のために扱うつもりだ。」
「そこまでは分からない。俺達はそのモデルの回収命令だけ出されている。」
そうか。ザルヴァートル・モデルの回収が目的でこいつらは追いかけてきていたのか。新国連の最終兵器にでもするつもりか？新国連のことはよく分からんが、素直に要求を聞いてくれるとは思わない。
そうやって俺の島も滅んだからな。…あれは自業自得っていうのもあるが。
「…信を切り替……さ…。」
突然年を取ったような女性の声が聞こえてきた。俺と通信していた奴は普通の男性の声だった筈だ。
暫くざざざと音がして、声が聞こえてくる。
「初めまして。ザルヴァートル・モデル、マークニヒトの搭乗者。」
「…どなたで？」
「ヘスター・ギャロップ、と言えば分かりますか？」
「…ああなるほど。」

新国連事務総長、ヘスター・ギャロップ自らが通信をするだと？
それだけザルヴァートル・モデルを回収したいのか？
「貴方は我々にザルヴァートル・モデルを差し出す権利があります。」
「権利、とは？」
「貴方が操縦してきたことにより、数多の兵士が貴方によって殺されてきたのです。
貴方がフェストゥムを殲滅する為のマークニヒトを奪い、ミツヒロ・バートランドを殺害し、
どれだけの人類が貴方に怯え、殺されてきたと思いますか？」
貴方がマークニヒトを奪い？
…あっ。
普通はファフナーの中に操縦する人間がいる筈だ。だったら、今の俺はマークニヒトを奪った罪人…という認識にもなるか？普通に考えて、マークニヒトが自律的に動いてるとは思えないか。
「悪いが差し出すことは出来ない。」
ヘスター・ギャロップは途端に黙った。通信の細やかな音だけが流れている。
「…そうですか。

では、あの北極大戦から消耗の激しいマークニヒトをここまで動かしてきた貴方を新国連に所属させるチャンスを与えましょう。
貴方が殺害してきた者の分まで新国連の元で働き、人類の為にその身を尽くすのです。」
…俺が殺害してきた人の分まで。
改めて、そう言葉にされると無意識下であっても俺が行ってきた事の重さを感じる。きっと、それぞれに家庭があって、それを守るために志願した兵士や国?に尽くすことを決めた兵士たちの思いを俺は軽く踏み潰してきた。
それを思うと、ヘスター・ギャロップの言う通り、新国連の元で償うのも一つの道なんだろう。

だがな。
易々と新国連に入れるほど、浅い感情を持っている訳ではない。

俺は知っている。お前たちが蓬莱島の技術を一方的に盗もうとしたことを。
島を踏み荒らし、コアを傷付けたことを。
あの人の墓石を、島の墓地を破壊していったことを。

だから、答えは決まっている。

「断る。確かに俺は人を殺してきたが、お前らの元でなくとも償いは出来る。」

「交渉決裂ね。ならば、無理矢理にでも来てもらいます。

…覚悟をしておくことです。」

ブツリと通信は切れた。

もうここにいる理由も無い。その場を去ろうとしたが、クジラを呼ばなければいけなかった。

結局使わなかった銃をその場に放り捨てて迷いなく海中へと潜る。

クジラと話していた所よりも深く。深く潜れば暗闇の中でハッキリと分かる金色が見えた。

その色へ近付くと、あちらもこちらへ近付いていく。

…別のフェストゥムだったりしないか恐ろしくなってきたな。

いつでも戦闘できるようにしておこう。

恐らくクジラと思われるフェストゥムは俺に近付いて頭に噛みついてきた。

しばらくもみもみと噛まれてぱっと口を離して頭を掌に擦り付ける動作をした。
（…いや、これはクジラだな。）
ふぅ、と息が出る。どうやら少し緊張していたようだ。空中から感じる視線も無くなっていた、というのもあるか。
「いくぞ、クジラ。」
暫くは空を飛べそうにない。今は海中で移動することにした。
クジラの隣を泳ぎながら移動するのも、いいだろうと思えた。

◇

「そうだよ。忘れちゃいけないんだよ。あいつらのしてきたこと。
愚弟にしてはよく考えたじゃん。」
僕と同じ目の色の竹の周りをくるくると回る。これは蓬莱島のミール本体だ。
…ここの中に、たくさんの島民の思いが詰まっているんだ。
たくさん、踏みにじられた思いが辿り着いた場所だ。
たくさん、無意味に殺された者たちの墓場だ。

…もう二度と、壊されてはいけないんだ。
もう二度と、同化されそうになってもいけない。

「僕らは僕らだ。ちゃんと個々の性質を持っている。決して同質ではない。」
そんな単純な事を、あの大人たちは理解できていなかった。僕らを消耗品として数えていた奴らに、この領域に至れる筈は無い。あんなに知りたがって研究し尽くしたいと考えていた領域に指一本すら触れられないなんて、とっても哀れで…。

ざまあないね。

「さぁ、愚弟はどんな風に死んでここに来るのかな？
兄は君が役に立ってから死んでくれることを願っているよ。」

第１０話　俺と鳴き出したクジラ　※お知らせ

陸に出れば空から謎の視線を感じ、人類軍が来る。
そういったことで、移動は常に海中で行っている。
海の中へ潜ればその視線が消えるし、人類軍の追跡もやって来なくなるからだ。
しかし、クジラと海中水泳を楽しむのは嫌いではないが、ずっと海中に潜っているのも如何なものかという理由でたまに陸へ出ることがある。
とある無人島の浜辺であったり、空を飛んでみたり、結晶で出来た土地で少し休んでいたりしていると、人類軍は姿を現すようになった。
まぁ…順当に考えれば謎の視線が俺の位置を把握し、何らかの手段で人類軍に位置情報を送っている、ということなのだろう。
元々北極大戦は新国連が衛星奪還の為に行っていたものだ。もしかすると北極大戦で目当ての人工衛星が手に入って、俺の位置を確認しているとも考えられる。
どちらにしても位置を特定されるというのは、とても厄介だ。あの視線がある限り、俺の位置情報は丸わかりだ。とはいっても、上空に雲や何かしらの物があると認識を手こずるらしい。島に生えている密林や、曇りだった時はあまり上空からの視線を感じな

かった。
　では曇りの日に海から出れば？と言われても地域によって天候は変わりやすくなる。出た当初は曇りだったが急に晴れて人類軍が突撃してくる、なんて自体は何回か起きている。
　…それから個人的な感情だが、曇り空よりもやはり、晴れ空の方が空を飛んでいる心地がするからな。晴れている時に空を飛びたいと思ってしまう事が多々あり、何度も襲撃を受ける羽目になってはいる。俺の落ち度だな、うん。
　追跡してくる人類軍のファフナーの足を壊して武装解除させるのは大変面倒だが、人命を落とさせるよりはいいだろうと思う。今も作業が終わって海に潜るところだ。さらば晴れ空。

　海に潜り、クジラと並走する。
（…この前陸へ出た時は凄かったな。ここで休もうと思った場所がフェストゥムの巣だった。）
　見渡す限り金色、金色、金色で一瞬同化されることを覚悟した。こんな一斉にやられたら回避も出来そうにない、と思っていた。

しかし、そこのフェストゥムは俺に一切攻撃をしてこなかった。クジラのように寄ってくることは無かったが近寄ってみても同化されたりなんてことは無かった。

その時は人類軍が連続でやってきて疲労が溜まっていたので、少しばかり場所を拝借して休ませてもらった。クジラは海から顔を出しながら海上を回るフェストゥムと戯れていた。

正に、平和といった様子だった。

自由にフェストゥムは浮き、ミールらしき物体の周辺を様々なタイプが浮遊している。

フェストゥムの生態をちらりと覗き見したような感じだった。

そして、クジラを見て感じていたことが少し立証されたような気もしていた。

フェストゥムが人間の感情を学び始めた。

きっかけはやはり、あの北極大戦だろうか。一体誰が学ばせたのかなんてことは、蓬莱島のミールの元に退散していた俺には知る術がない。そのようなことを考え、休ませてもらった場所から俺は去った。

そこからは海中で移動し、たまに陸へ出て日干し、後に人類軍を対処して…の繰り返しだ。途中クジラと同じ形のフェストゥムがいたが、そのタイプをクジラは積極的に食

べた。いや、同化したという言葉が正しいか。一瞬で見つけて丸呑みし合って、同化し合った末にクジラが残っていたが…ともかく、クジラのお陰でフェストゥムと戦わずに済んでいた。

「お前も…結構、いや大きくなったな……。」

隣を泳ぐ金色の巨体を見る。

同化を繰り返したクジラはとても大きくなった。甘噛み（らしい）行為が、丸呑みになる位には大きくなった。

クジラはどうだ凄いだろう、と言わんばかりに体を揺らした。クジラにとって些細な揺らしであってもその巨体によって隣を泳ぐ俺はぐらぐらと揺れる。

（いずれは小さな島なんて一飲み出来てしまいそうな程大きくなったりして。）

そうなった場合、もう隣で泳ぐよりかはクジラの胴体に乗って移動した方が早いかもしれない。いつぞやか見た漫画みたいなことが出来たりしてな…。

蓬莱島で見ていた鮫と意思を疎通できる少年の漫画をふと思い出した。

「いや、クジラでやるには些か表面がつるつるとし過ぎか。」

それに掴める背びれも無いし。

ん？何だクジラ。急に口を開けて…。

あっ。

クジラの内部は凄かった。

内部でアンカーユニットを総発射したら出してもらえたが、クジラにも感情があるということがこの件でよぉく分かった。

「分かったからもう丸呑みはやめてくれ。な?」

新たに見つけたフェストゥムの巣でそう弁明した。

◇

クジラの成長は留まることを知らずにぐんぐん大きくなった。それから不思議な鳴き声らしきものを出すようになった。俺には言語化できない類の音声で、ひとしきり鳴き終わるとぐるっと振り返って俺を見る。

それに「何をやっているか分からない」という意味を込めて肩を竦めれば丸呑み。拍手すると体を揺り動かして激しく喜ぶ。その際にも何かの鳴き声を上げるようになった。

何となくクジラが音声でコミュニケーションを取ろうとしているのは伝わってくる

んだが…。
(何か言おうとはしてるんだが、俺には何言ってんのか分からないんだ…)
　肝心の言語が分からない。英語でも無いからなんか海洋生物かフェストゥム独特の音声だと思う。俺は学校へ行って教育を受けてはいないから英語は軽くでしか読めないんだが。
「――――!――!――――――!」
　…それにクジラが鳴くと大抵のフェストゥムが反応してやってくる。知り合いなのか他人なのか、それをクジラが丸呑みして強制的に同化してまたクジラの体格が大きくなるの繰り返しだ。
　おかげでクジラの上に寝そべりながら快適な旅行を楽しんでいる。まぁ機体の俺を日向干ししていると高確率で人類軍がやってきて撃退しなければならなくなる。
　最近人類軍関係で笑えたのは網を持ってきたことだな。特殊な素材でも使っているのか日干ししている機体の俺に網を被せて機体の俺を持って行こうとしていた。しかし、日向干ししている地面はクジラだ。勝手に上に持って行かれる俺を網ごと食い千切って海中に潜った。折角の日干しがパァになったが、「網持ってくるのか」と機体の俺の内部で俺は笑い転げていた。
　そんなこんなでクジラと快適に旅行している訳だが…。何やら見覚えのある島が目

前に見える。
（もしかしなくても、竜宮島じゃないか？）
アルヴィスは周囲から見えないようにヴェルシールドが展開されている筈なのに奇妙だ。そんな丸見えだったらすぐさま人類軍が突撃してきている筈だ。
竜宮島から少し離れたところに見覚えのない艦隊が見える…が、フェストゥムの巣だ。フェストゥムの反応が大勢ある。一部反応が弱いのか緩く点滅もしている。ファフナーの反応も数機見られる。
（ヴェルシールドの剥がれた竜宮島にフェストゥムの巣…もしかして敵襲でもされたのか？）
だったら助けた方が良いのか…？それにしては両者とも動いていないから何らかのことでも起きたのか。
紫色を帯びた雲の合間合間から頭上からの視線を感じる。このままヴェルシールドを未展開のままだと人類軍でもやってきて攻撃そうだな…って。
（言った側から来やがったあいつ等！）
「ーーーーーー」
絶対碌な事しない。蓬莱島を破壊したんだから絶対あいつ等は竜宮島だって破壊する。

その証拠に遥か上空に飛行船ならぬ爆撃機が飛んできている。
「ごめんクジラ。ちょっと潜っていてくれ。
…、それから人と応戦しても決して殺すな。」
「――――」
推進ユニット、アンカーユニットの調子も万全。とはいえ、最近はまったく動かしてなかったから軽く動かして…よし、大丈夫そう。
（おっしゃ、飛ぶぞ）
推進ユニットを起動させて空を飛ぶ。ガソリンは無料で無限だ。かっ飛ばしていく。
クジラから見た時は粒状だった人類軍の飛行船がはっきりと見える。大きい飛行船の周りを小さい飛行船で囲んでいる。取り合えずデカい方からハッキングしてみる。明らかに何か積んでる大きさだ。
無防備な背中に降りてアンカーユニットを一本ぶっ刺す。
途端にコクピット内に利用者権限でアクセス出来ないという表示が出るがこのマークニヒトには関係ない。アンカーユニットからウォール機能を無効化するウィルスを流しこめば勝手に開けてくれる。なんて親切な設計なんだろう。
画面上に浮かぶ機体情報から渡航記録、積まれた爆弾の情報まで脳内に記録されていき人類軍のやりそうなことだと思った。

「好きだよなぁ…核を使うの」
それで母の様な日本人たちは人も土地も半分以上が消え去った。日本人が人類軍とフェストゥムの追撃を逃れるために作った楽園がアルヴィスだった。
作られたアルヴィスは三つ。その内二つは消滅。残りは竜宮島だけだ。純粋に日本人と言える人たちも、アルヴィスを作った人たちが守りたかった人たちも。
「壊させる訳にはいかないんだよ」
蓬莱島はもう滅んでしまった。確かに俺の故郷だった場所を滅ぼされたからだとしても、他の島まで滅んでしまえと願う程俺は傲慢じゃない。
核の使用権限を奪う。ボタン一つでも遠隔操作も出来ないように、確実に発射させないようにシステムを凍結。それから他の爆撃機にもアンカーユニットを伸ばし、同じことをする。
おまけで全ての爆撃機の操作をオート操作に変更しておく。流石人類軍、爆撃機にもオート操作なんて物を使ってらっしゃる。おかげで平和的に戦線離脱させる手間が省けた。
「てことで、数時間の旅行を楽しんで来い」
アンカーユニットを引き抜いて最寄りの人類軍基地にまで飛ばさせて終了。二度と核を使ってくるな。手間がかかる。

空から見下げればフェストゥムの巣はどこかへ離れていっていた。何だったんだアレ。

俺もクジラの所に戻るかと思い、海上へ近付けばファフナーの反応がいくつも集まっている。

（って、クジラァ！）

何という事だ、クジラがファフナーの攻撃から逃げ回っているところだった。

第１１話　対談要求

「ソロモンに反応あり！リヴァイアサン型です！」
「何だとっ!?」
「それに…！謎の機体反応あり！これは……マーク、ニヒト…？」
「マークニヒトだとっ!?」
　その言葉にＣＤＣにいた全員が動揺を隠すことが出来なかった。なんてことだ、今日は厄日だと嘆きたくなるようなタイミングの悪さであった。
　彼ら、否竜宮島は先程まで来主操と呼ばれる人型のフェストゥムが属するボレアリオスミールと戦闘状態にあった。ボレアリオスミールは竜宮島最高戦力であるマークザインを複製し、フェストゥムがファフナーを扱うといった考えられる中で最悪な状況であった。
　来主操がこの竜宮島に来訪時に乗船していた黒船に皆城総士が残したデータからボレアリオスミールの現在地を特定し、残されていたファフナーパイロットたちは島の防衛とボレアリオスミールへの陽動隊とで別れた。
　島の防衛には遠見真矢、羽佐間カノン、堂馬広登。陽動隊には近藤剣司、要咲良、西

尾里奈、西尾暉らが当たることになった。
　来主操が真壁一騎と対話途中に暴走し、彼を通じてボレアリオスミールはマークザインを複製し、来主操を搭乗させた。彼にはボレアリオスミールに抗う気力は無く、指令が下されるまま竜宮島のコアを同化しようとした。そこで本来のマークザインの搭乗者であり、先の北極大戦での同化現象も落ち着いた真壁一騎が彼と応戦。
　来主操はザルヴァートル・モデルの性能を遺憾なく発揮し竜宮島を追い詰めるも、一騎との対話によって来主操はボレアリオスミールに抗った。同時刻にボレアリオスミールに接近していた日野美羽の能力によってボレアリオスミールと対話を試み、ボレアリオスミールらの竜宮島の同化を止めた。
　その後、来主操はボレアリオスミールの元に行き、彼らと共に生まれ変わることを選択した。そして、北極大戦時に無の彼方へと行ってしまった彼らの仲間である皆城総士も無事存在を取り戻し、竜宮島に帰還した。
　その後の出来事だった。遠方から人類軍の爆撃機の反応、人類軍よりも近くに巨大なリヴァイアサン型のフェストゥムにマークニヒトの反応。
　もう為す術も無く蹂躙されるだけだと周囲が感じ取っていた。しかし、マークニヒトは竜宮島ではなく人類軍へ接近していた。
「マークニヒトが人類軍の爆撃機へ突入していきます…！」

「…どういうことだ?」
　そのまま対消滅でもしてくれれば良いが、と心の中で臨時指令を任されていた溝口恭介は思った。
「人類軍が…戻っていきます!」
「…マークニヒトがやったのか?」
「リヴァイアサン型、まったく動きが見られません。いかがしますか」
　誰もがマークニヒトの行動に疑問を抱き、次にリヴァイアサン型に頭を抱えることになった。本来のフェストゥムならばまったく動かない、という事は無いだろう。何かしらの行動を起こし、竜宮島に危害を加えてくる筈だ。
「…確か、今動けそうなのは一騎くらいだったか?」
「はい、マークジーベン、マークフュンフ共に機体の損傷が激しく動けそうにありません。…マークドライツェンが辛うじて動作可能です」
「一騎とカノンに行ってもらうか…」
　あの激しい戦いの後だ、ゆっくり休ませてやりたい気持ちはあった。しかし、島の脅威となるものを見過ごす訳にはいかず、疲れ果てた子供の体に鞭打つ行為に辟易しながらも溝口は指示を飛ばした。
　そうしてリヴァイアサン型、マークニヒトからは〝クジラ〟と呼ばれる特殊個体の元

へ一騎とカノンが向かった。
「近付いても、同化しないのか…」
「攻撃もしてこないな…」
　マークザインの手の中には、皆城総士が乗っていた。彼はフェストゥムの境界で存在を確立させたせいか、体はフェストゥムの力によって構成されている。彼からは無の力と呼ばれるソレが、眼下で佇んでいるクジラに妙な胸騒ぎを覚えさせた。
「しかし、このままという訳にもいかないだろう」
「…攻撃を開始するっ！」
　マークドライツェンがルガーランスからプラズマ弾を放出した。水面から少し見えるように浮いていたクジラはその気配を察知し、巨体からは考えられないほど素早いスピードでルガーランスの弾を避けた。
「なっ！」
　攻撃されても尚、クジラは水面からマークザインらの様子を窺っていた。榊が去る直前に言った「人は攻撃するな」という言葉を守っているからだ。本当ならば攻撃してきた奴らは同化してやりたいほどの感情を、クジラというフェストゥムははっきりと持っていた。そして、それを一人の言葉によって抑えることが出来ていた。
　次々とプラズマ弾が放出されるも、ひたすらにクジラは避けた。しかし避けるだけで

なく弾を大きな尾びれで跳ね返すといった動作もした。
次第にマークザインも攻撃に参加するようになる。
マークザイン、ザルヴァートル・モデルの一つであり武器と同化することによる武器の能力向上が凄まじい。そのような機体のルガーランスのプラズマ弾は弾ではなく、ビームとなってクジラに襲い掛かった。

プラズマ弾より素早く威力を持った攻撃と同時に、マークニヒトがクジラの元へ戻ってきた。

◇

（うっわ…）
マークザインの放ったルガーランスの弾…ビームを見て辟易とした気分になった。流石はザルヴァートル・モデル…、それにしてもデータに記録されている物よりもマークザインの能力が向上している気がする。
この場合、マークザインは俺の兄弟機とでも言ったところだろうか…？しかし、兄弟なんて単語に良い思い出は無いので却下だ。

クジラも避け切れずに自慢の尾びれが穴ぼこだ。

「――――――――――――！」

何となく声の激しさで怒っているのが分かる。まずはあのファフナーたちの注意を引く為と、連絡を取る為にアンカーユニットを三本射出。もう半分は暴れまくるクジラを抑える為に射出し、ぐるっと胴体に巻く。

（マークザインの手に人がいるのか。しかも、どっかで見た事ある顔……）

マークザインの手中にいる薄い茶髪の少年に既視感を感じながらファフナー目掛けてアンカーユニットを射出するも、中々掴まってはくれない。それにその手に持ったルガーランスで弾やらビームやらを放射してくる始末。流石アルヴィス産ファフナーとパイロットというか、人類軍とは格段に動きが違うな。

それからごめんクジラ。避ける時に一番振り回してる気がする。

オレンジ色のファフナーが射撃を止めてこちらに斬りかかってくる。なるほど、チャンスだ。

そこで避けることはせず両腕で受け止める。いつかのドラマで見た真剣白刃取りだ。その間に戻しておいたアンカーユニットを目の前の機体に一本だけ射出。今度は上手く刺さり、相手と通信が可能な状態になった。…有線でしか通信できないってのはデカイデメリットだよな。

〈あー…、聞こえるか。こちらに攻撃の意思は無い、海中にいるフェストゥムにも攻撃の意思は無い。攻撃を止めてくれ〉

〈貴様は誰だっ！〉

声からして女性か。しかし…、貴様は誰だと来たか。榊を名乗るべきか、マークニヒトを名乗るべきか…。

いや、ここでマークニヒトとか名乗ったら混乱しそうだな。無難に人間名の方を伝えておこう。

〈俺の名前は石上榊。訳あってマークニヒトを操縦しているが、貴方方もとい竜宮島に危害を加えるつもりは無い。俺と海中のフェストゥムは即刻竜宮島から離れるので、今一度だけ偽装鏡面及びヴェルシールドの展開を止めて欲しい〉

背後の方で見えた偽装鏡面が張られる際に見られる、ぼやけた瞬間を捉えながら目の前の機体にそう告げる。

…通信先で何やら動いている音がしている。

ヴェルシールドが張られてしまったら内部から出る事なんて出来やしない。じじじ、という音の後に先程の女性の声とは違って男性の声が聞こえてきた。

〈司令官代理の溝口だ。竜宮島は海中のフェストゥム、及びマークニヒトの攻撃を取りやめる。

その代わり、そちらのマークニヒトの搭乗者との対談を求める〉

〈…要求に応えよう〉

俺との対話だと？いや、一度は竜宮島を襲ったマークニヒトの搭乗者なんて気になるも当然か。

司令官代理とやらの溝口の指令はあのファフナー二機にも届いたのか、俺に向けていたルガーランスを降ろしこちらを見つめている。オレンジ色のファフナーとクジラからアンカーユニットを戻し、抑えていたクジラの元に行く。

海辺にむすっとした表情で佇む巨体に語り掛ける。

「クジラ、約束を守ってくれてありがとうな。…それから振り回してごめん」

声を掛ければクジラが振り向く。なんだ、と言わんばかりの態度に苦笑いが出る。

「すまないが、これからもその約束を守ってくれ…頼む」

俺はクジラに、人殺しになって欲しくない。俺に出会う前には当たり前の様に人も同化していたのかもしれない、それでも止めて欲しかった。人の命を奪うなんざ、きっと碌でもない場所に落とされるに違いない。

…クジラならきっと天国に行ける筈だ。根拠のない自信が俺の胸にそんな感想を抱かせる。人間にもあるのか分からない物にフェストゥムに適応するのか分からないが。

クジラは高く上げていた口で俺を突いた。それから小さく鳴いた。何となく「いい

よ」みたいなニュアンスだった気がする。

海上から続く浜辺に機体の俺を降ろす。さっきまで応戦していたファフナー二機のパイロットとマークザインの手中にいた奴が近くにいる。彼らが案内でもしてくれるのか。

（急に銃を突き付けられたりなんてことは無いと思いたい）

人類軍じゃあ無いし、相手から対談を求められている訳だからそれなりの対応がある筈だ。

そう思いながら俺は機体の俺から出た。

降りた先では驚いた様な表情をしたパイロットたちがこちらを見ていた。

第１２話　疑い深き狐の如く逡巡するのは機械

――しまった。コクピットを開きながら出るんだった。こんなんじゃ普通じゃないってわざわざアピールしているようなもんだ。

特に薄茶の方の少年の視線が辛い。何か鋭すぎて刺さっている気分になる。

「えーと、君らがアルヴィス内部に案内してくれる訳？」

「いいえ、そろそろ来ると思います」

マークザインから出てきた搭乗者が向けた目線の方向には、銃器を持った黒服の大人たちがこちらに向かっていた。

インカムで通信を取り合い、俺から搭乗者たちを守る様に庇い、俺は黒服の男たちに囲まれた。

銃口を突き付けられたら手を挙げるしかないよな…。

「話が早いな」

「経験があるもんで」

通信から聞こえたことのある男の声だ。一人だけ頭の装備をしていない男が溝口とやらなのか。

「暫くはこのままでいてもらうぜ」
「気が済むまでご自由に」
背中に銃口で突かれながら黒服の男たちが先導する道を歩く。…そういや、今ここに肉体を持っている俺が攻撃を受けたらどうなるんだ？普通に血が出るか、機体の俺にも風穴が空いたりとか、そんな状況になるのか？
そんなことを以前見た時よりもボロボロになった竜宮島を見ながら考えていた。あらまぁ、こんなになっちまって。これじゃ竜宮島のコアもかなりダメージを負ってそうだ。
道中、男たちは何も喋らずに竜宮島の地下、もとい第一アルヴィス内部の一室へと案内した。アルヴィスといっても第一と第二で結構構造が違うものだと気がついた。
「ここで待ってろ。すぐに司令官が来る」
そう溝口が言い残して二人ほど黒服の奴を置いて室内から出ていった。
そろそろ手を降ろしても良さそうだ。背中から強い視線を浴びながら手を降ろす…その前に今まで付けていた笠を外す。対話するのに流石に笠は付けていられない。俺の一部みたいなもんだけど。
笠は膝に置き、手も膝に置いて司令官とやらを待つ。
…話す前にどうやって言い訳するかを考えないとだな。

まず、自らがマークニヒトであることを言う必要は無い。普通に考えて人がファフナーになってるだなんて奇天烈な情報を出す訳が無い。というか、俺としてはさっさと竜宮島を抜けてクジラと二人旅でもしたいんだが。何の為に対談なんてするんだ…？

あ、もしかして以前竜宮島に突撃してしまった件についての説明要求？それは素直に謝ろう。コアの不祥事は俺の不祥事だからな…。

部屋の扉が開く音がした。そこには先程の溝口と厳つい顔をした大人が立っていた。

「君が石上榊かね」

「そうですが」

「私が司令官の真壁史彦だ。よろしく頼む」

そういって右手を差し出す。握手の構えだ。俺も立ち上がって差し出された手を握る。…大人の手ってこんなに骨張ってるもんなんだ。

握手も終わり自然と向かい合う形になる。真壁史彦が俺の座っていた席の向かい側に座り、俺も座る。

目を逸らしたら負ける、そんな緊張感が張り巡らされる。

「単刀直入に言おう。どこでマークニヒトを手に入れた？」

「話せば長くなりますが…」

そう一拍置いて即席で考えた偽経歴を話す。

「元々蓬莱島にいたのですが、諸事情があって島を追放されました」
「蓬莱島の島民だったのか…」
「ええ。追放され、その先で人類軍に拾われて入り、マークニヒトのテストパイロットに選ばれてあの機体に搭乗したんです。しかし…」
「しかし…？」
「その後の記憶が思い出せなくて…。機体の搭乗には成功したんですがそこから一切の記憶が無くて、…いつのまにか北極の方にいたんです」
「…ふむ」
　実際は狩谷も俺もコアに同化されてー…っていうことだが、経緯がややこしいので省略だ。
　でも、狩谷は確か竜宮島出身だったっけ。狩谷の親しい友人とかにそれとなく伝えて置くべきか…？
　少し間を置いたが、真壁史彦からは何も言葉を発さない。続きを話せ、ということか。
「そこから海であのリヴァイアサン型のフェストゥムと出会って、何となく付いてくるのでそのまま同行しているんです」
「フェストゥムと？君は同化されたりしなかったのか？」
「ええ。今のところ同化しているのは同族のフェストゥムだけです。それから、不思議

とこちらの言葉を理解している様な素振りも見せます」
「それは…なんと…」
　クジラのことを話せば少し驚いた顔をした。やっぱりクジラって特殊な個体なのか…。
「それで、君はこれからどうするつもりだ？」
「自分の寿命が尽きる限りクジラと過ごそうと考えています。人類軍からもマークニヒトを盗んだとかなんとかで追われていますからね」
「ふむ……」
　本来なら寿命なんて関係無いけどな。それでも本当だ。帰るべき場所も無いなら適当に過ごすしかない。ならクジラとこれからを過ごすのも悪くない。酒が無いのは問題だがな。
　…人類軍基地でも襲撃すれば酒は手に入るだろうか？だが俺が求めているのは日本酒であってワインやらウィスキーなどでは無い。それらを一度飲んでみるのも楽しそうだが、今はあの日本酒の刺激が恋しい。竜宮島には酒造屋とかあるのだろうか。あったら一瓶だけ持ってクジラと二人旅でもしたいんだが…。
　真壁史彦とその後ろにいる溝口は難しい顔をしたままだ。もうこちらから話すことは無いと黙っていれば溝口が真壁史彦に何やら耳打ちをしていた。何だろう。

「君は蓬莱島出身と聞いたが」
「はい、そうですね」
「リディル・モデル、この単語について聞き覚えは？」
「…」
　は…？リディル・モデル？何で竜宮島からその単語が出てくるんだ？
「その様子だとあるらしいな」
「っ…」
　つい態度に出てしまっていた。口元が歪んでいくのが分かる。あんな、あんなクソモデルのことについて聞きたいだと？一体何を考えているんだ？
「あんな悪趣味なモデルを作ろうとでもしているのですか？」
「悪趣味？それはどういうことだ？」
「悪趣味も悪趣味、文字通り人の命を使って作られるモデルですよ…。いや、これは他のファフナーにも言えることですかね」
「…詳しく聞かせてくれるか」
　一層、真壁史彦の顔の皺が険しくなった。この人に話しても良いのか、そんな疑問が過る。
　目の前に座る真壁史彦という男は蓬莱島の大人達よりかは誠実そうだ。だが、それが

演技だとしたら？リディル・モデルの構造を聞き出して、それをあのパイロットたちに応用させるのか？

黙りこくっている俺に真壁史彦が語り掛ける。

「言うのも憚られることなのかね？」

「…いえ、話します」

何か起きたら島を落とす。僅かでも喜ぶのなら即刻機体の俺を動かして消す。

そう決意して俺が知るリディル・モデルについて目の前の大人に話す。

「蓬莱島ではシナジェティックコード形成値が低い子供が多かったのです。

竜宮島の様に生身でファフナーを動かせる様な存在は誰一人としていませんでした。

…そのファフナー自体も開発途中でしたがメインシステムにコアを組み込む設計思想はあって、それに使用するコアを人工的に製造する技術はあったんです」

「コアを人工的に製造する…？」

「ファフナー開発当初はミールから分岐したコアを組み込まれましたが、全て動作確認で砕け散りました。

そういった事情でコアを人工的に製造しようということになったのです。

ファフナーもそれを動かすパイロットもいない、そんな状況でコアの加工技術だけが発達しました」

「…おいおい、まさかその子供が材料とか言わないよな?」
徐々に冷たくなっていく部屋の中で茶化すように溝口が言った。
でも、その言葉が紛れも無い事実だった。
「正解です。蓬莱島は子供の意識を残したままコアに加工し、ファフナーを自律操作させる新型ファフナーのモデル開発を進めました。
そのモデルの名をリディル・モデルと言います」
その言葉に目の前の二人、それか背後の二人も驚いている様な気配を感じる。空気が凍り付いて、喉に張り付く様な緊張感を少し感じる。
このリディル・モデルも、コアの製造方法も手法や材料を聞いているだけで俺が実行に移せる物ではない。でもそういったアイデアがあるというだけで試行することは出来てしまう。
四人ばかりの呼吸音を感じながら静まり返った空間に佇む。真壁史彦の顔ははっきりと歪み、その眼差しを俺に向けている。
「確かに…悪趣味なモデルだ。竜宮島で製造を行うことは一切無い」
きっぱりと、決意を固めた眼差しで言い切った。その目に喜色も、偽りの色も全く見えなかった。
…島が違うと、こうも大人の気風というのも違う物なのか?

「…そうですか」

ああやっぱり、蓬莱島のやってきた行いとは非人道的で畜生にも劣る行いだった。目の前の大人の反応を見ればそう感じたのは間違いではなかった。

誰一人として止めようとしなかったコアの製造研究、リディル・モデルの開発。こぞって自分の引き取った子供を金のなる木へ変換させる親なんて、この竜宮島にはそうそういなかったのだろう。

『人間の体を捨てて俺達の防波堤になれ！時には金になれ、時には戦え、戦え！

戦い、俺達に死ぬまで尽くせ！それから呆気なく死ぬんじゃねぇぞ!!

テメェらの存在の搾りカスですら俺達が利用しつくしてやる!!いいか！

じゃあさっさと死ね!!』

リディル・モデルの仕組みを一々解説してきたクズの声が蘇る。

アイツも蓬莱島が滅んだと共に死んだのだろうな。それは良かった。

「なるほど、蓬莱島がそのような研究をしていたとは」

はぁ、と溜息を吐いた真壁史彦の目は明らかに疲れていた。背後の溝口も同じような顔をして、今まで見せていた警戒を若干解いている気がする。

「ご理解いただけた様で何よりです」

「……君には帰る島も無いのだな」

「事実上では、そうですね」
　一応蓬莱島のミールは生きてるらしいが、あの無人島での通信以来胸糞悪い声が聞こえたことは無い。それにほっとしているんだが、何だか。現状を聞きたい気もするが、あの声が無理だ。
　島は滅んだが中心にあるミールは生きている。それは伝える必要も無いか。
「ならば、竜宮島に来ないか」
「そうですね……ってへ？」
「お前さんみたいな子供が寿命を擦り減らす必要はねぇってことだな」
「いや、俺が子供？ええ…？」
「どう見ても高校生ぐらいだろお前さん」
　コウコウセイ…あ、高校生のことか。そうか竜宮島は高校まであるのか。何から何まで蓬莱島とは違うんだな…。
　って、そういうことじゃない。何普通に受け入れようとしているんだ、マークニヒトに乗ってた不審者だぞ俺は？しかもフェストゥムを引き連れているような奴を受け入れるか？
「く、クジラとかの件もあるのでご迷惑になるかと…」
「人の言葉が分かるのだろう。であれば、人との共存も可能な筈だ」

「いや、共存ってそんな夢物語ある訳無いでしょう」
「人とフェストゥムは共存できる、竜宮島はそれを信じている」
「ははぁ……」
インカムで何やら溝口が誰かと通信している。真壁史彦は先程の顔つきから打って変わったように僅かに笑っている。
…そんな目で俺を見るな。おかしい、「俺こんなクレイジーな島出身なんです」って紹介で遠ざける筈が…同情？あの目は同情か？そんなものをされているだと？
どうする、どうすれば竜宮島から離れられる？どうすれば…。
――貴方がこの島に入ることを許してあげる。その力を…私たちに貸しなさい。
「…竜宮島のコア？」
迷う俺の脳内に少女の声が響いた。以前の竜宮島のコアの時と同じ声だが、僅かに声音は低めで口調は強めだ。
…結局、何で俺はこんなにも竜宮島に入ることを恐れているのだろうか。”羨ましい”と感じたからか？蓬莱島よりも豊かに、人の笑い溢れる島にいるのが辛いのか？
竜宮島に入るメリットを考えよう。ヴェルシールドが遮ってくれるのか、海上で感じた視線を感じなくなること。クジラを受け入れることに何故か寛容であること。えーと、飯とか食べられそう？酒造屋もありそうで…。

それから…、狩谷の訃報を伝えることが出来て墓を作って貰えるかもしれない。例え島を裏切ったとしても彼女はこの島の一員だった。せめて地元で死を弔ってもらうのは、島に良い感情を持っていなかった彼女に対する冒涜だろうか。

デメリットは人類軍に追われ続ける生活を送ること。…メリットの方が確実に大きいな。

黙りこくって考えている俺に、その場にいる人物全てから生暖かい視線を感じる…。何であんな嘘話で絆されてるんだ、どれだけ人が良いんだここの島民。

「……ご迷惑になったら速攻で島から追放してくださって構いません」

「ああ、――ようこそ竜宮島へ」

再び伸ばされた手を握り返す。冷たい空気が瞬時に温くなって張り詰めていた緊張感も解れていった。

俺とクジラは竜宮島へ入島することになった。

第１３話　縮小したクジラ

「疲れた…」

膝にクジラの入った水槽を置いて硬いベットに体を倒す。クジラが一はねして水槽の水が揺れた。

あの会談から俺にはアルヴィス内部の一室を割り当てられた。これからはそこで過ごせという意味らしい。

それからクジラについては砂浜に迎えに行ったら何故かサイズが縮小していた。俺も、クジラの動向を監視していた竜宮島も困惑していたが、流石にそのまま放流というのは恐ろしいので俺に水槽が与えられて、その水槽にクジラが入れて共に監視…行動できるようになった。

「最初から小さくなれるならなって欲しかった」

そう言えば尾びれで顔を叩かれた。サイズが小さくなったのでそんなに痛くはなかった。

そんな事情を含みながら俺が竜宮島に来て最初にしたことは検査だった。染色体の変化とか健康診断、血液検査とかもされた。少し注射針は苦手だ。とっくに肉体は変質

しているというのに、また体が結晶化しそうで…。

コクピットに入れられた瞬間注射されてコアにされたからな。あれは一瞬のことで理解が追い付かなかった。

ケッ、あんな悪趣味な仕組みを考えた奴は死んで欲しい。いや、もう死んでたか。

溜息を吐きながら体を起こす。水槽の天井に付けられている蓋を外して指先でクジラを弄る。ひんやりとした水とクジラのつるつるとした表面で癒される。あ、噛んだ。でもそんなに痛くない。

そういえば、検査結果がどうなっているのかが気になるな。血液型とかは前とは変わってはいないと思うけど、脳波とかは調べられたから……俺が到底ファフナーに乗れる状態じゃないってのはバレたかな。いや、とっくに気付いてるかもしれないな。

バレたところで今更感はあるが…、危険因子として島から出して貰うってのもいいか。でもそうなるとあの時聞こえた竜宮島のコアを裏切ることになるか？

「分かんねぇ…」

ずるずると竜宮島にいることを決めたはいいが出たがる自分もいる。そんな俺を叱責するようにクジラが噛み付いた。先程より強い力で。

「痛くはって……こそばゆい？」

肩辺りが触られた様な感触がした。機体の俺の方に視界を切り替えて見ると、俺（マークニヒト）

の搬送が終わり、今からメンテナンスをする様子だった。先程のこそばゆさはエンジニアたちの手つきのせいらしい。

確か…、機体の俺が格納されるというのも随分久しぶりのことのように感じる。あの時の俺は記憶も曖昧で人に戻りたいなんて言ってたっけ。馬鹿みたいだな俺。

厳つい顔をした男性が指揮を執って点検してくれるみたいだ。点検するような傷とかは負った覚えは無いから…機体の性能でも調べられるのか。

だったら記憶領域にはロックを掛けておこう。記憶領域には俺の記憶が詰まっているので安易に見られたくはない。見られると困るものばかりだし…。特に蓬莱島関係のこと。

（って言った側からアクセスされたな）

脳にプラグが刺さるみたいにコンソールと繋がれている感覚がする。間一髪だったか。こっち側から竜宮島の情報を抜き取ることも出来るが今は止めておこう。やる気が起きない。

すまないエンジニアの方々。記憶領域のアクセス権限は俺オンリーなのでその足掻きは無駄足なんだ。

…ちょ、ちょっと。無理矢理開こうとしないでくれます？流石にそこらへんで暴れら

れると俺も脳の中がごちゃごちゃになるというか、大人しく諦めて欲しいというか。

うぐっ

…

エンジニアチームの諦めは悪く、あれからずっと機体の俺は頭の中を弄りまわされている。

現在の時刻は午前二時。一応手前で人と偽ったので寝ている振りをしている。天井から監視カメラも覗いていることだし…。でも実際はエンジニアたちとの攻防だ。

あちらの何としてでも記憶領域を開こうという強い意志を感じる。そっちがその気ならば俺は最後まで抵抗して見せる。そう、エンジニアチームが諦めるまで…!

ロックを開かせる為にアタックを仕掛けられて頭痛はするが、多分大丈夫だ。その間に俺は記憶の二重ロックをしておこう。万が一開けられた時の為に。万が一、万が一だからな…。

俺がコアになったからというか、俺自身がファフナーになっているのでファフナーの記憶領域にも俺自身の記憶が記録されている。それから今の機体はマークニヒトなの

で、マークニヒトが製造されてから今までの軌跡も勿論記録されているし、アイツが同化してきた人間の記憶もばっちりと残っている。

改めて見るとアイツ結構人を殺してきたなぁ…という感想が出てくる。痛ましいことだが、生者は死者に対して死を弔うこと位しか出来ない。殺してきた人の宗派によって弔い方が違うかもしれないので手くらいは合わせておこう。心の中で。

これは違う誰かの記憶で、これは狩谷の記憶か？…何やら仲の良さそうな二人がいるなら、その人たちに伝えるべきか。遠見弓子に日野道生。顔も併せて覚えておこう。

〈やぁ。竜宮島に入るとは結構やるじゃないか〉

帰れ。

〈最初の言葉が帰れとは酷いね。君が唯一残存しているアルヴィスに入ってくれたお陰で頭上からの厄介な視線も消えたからお礼でも言おうと思ったのに〉

頼んでないから帰ってくれ。

〈まぁいいけど。はいはい帰りますよ〉

……。行ったか？

声もしないから帰ったか。はぁ…心臓に悪い。なんで急にあんな声を聞かなきゃい

けねぇんだ。
あの声も空からの視線は鬱陶しかったのか。益々あの視線の主は誰なんだか気になってくるな。
頭上だから空にいるんだよな…。もしかしたら新手のフェストゥムなのか？だとしたら人類軍とフェストゥムが手を組んでいる？いや、それは無いか。あのヘスター・ギャロップがそんなことする筈無いな。ミツヒロの思想に同調して俺の製造費を密かに増やしていた奴がまさかそんなことする訳無いだろう。
あの視線の主をフェストゥムと仮定して、人類軍とあの視線の関係はたまたまってこともありえるか。あの視線を感じるというか海上に出ていたら人類軍のセンサーに俺が引っ掛かっていただけかもしれない。
…やっぱ、何とも言えないな。
……なんか頬が水っぽい。というか濡れているし叩かれている。
仕方ないので目を開ける。目の前…本当に目前の場所にクジラがいた。
おかしい。クジラの入った水槽は部屋にある机の上に置いたのに。俺が目を開けたことに気が付いたのかクジラが叩くのを止めてこっちを見ている。
「何やってんだ…？」
「ーーーー！」

嫌な予感がしてベッドから体を起こした。机の上に置いた筈のクジラがここにいる。ということはだ。

「あわぁ……」

机、椅子、地面へと構い無しに水は広がってまき散らされている。水槽は地面に落とされている。机周辺からベッドには移動してきた足跡らしい水だまりが繋がってはベッドで途切れている。

…良かった、水槽がプラスチック製の物で本当に良かった！初日から水槽壊したとか言い辛い物がある。

ベッドの上にいるクジラを見ると、やりきったぞという感じに頭と尾びれを上げるポーズをした。

「お前なぁ…？今夜中なんだぞ……いやお前には関係無かったか……」

そう言えば昼夜関係なく動いていたもんな…。まるでマグロみたいに動き回っていた日々だった。

…まずは水を拭き取ろう。確かタオルが部屋に取り付けられている浴室にあった筈だ。ベッドから出て浴室兼洗面所の場所に行って、まだ使われず畳まれてある白いタオルを持ち出す。

地面に落ちている水槽の水気を先に拭いて、机の上に広がる水を拭きとって、次は椅

子、地面と。水を吸い取り過ぎて拭けなくなったタオルは一旦洗面所で絞り、地面に広がる足跡を拭いていく。

ちなみに一連の行動を、この犯行を起こした犯人は満足気にベッドの上から眺めている。いや、ベッド付近の水溜まりを拭いていた時に頭の上に乗ってきたがそのまま乗っかることもなく、ずるっと地面に落ちた。

「ーーーー!」

「知らないからな」

クジラを掴んでベッドの上に置く。一通り拭き終えたので今度は水槽に水を貯めなければならない。ベッドの上でピチピチと動いているクジラをまた掴んで水槽に入れる。

洗面所でクジラを入れたままの水槽に冷水を入れる。水槽に貯まるまでは少し時間がある。水槽の様子を見ながら凭れることにした。

先程より頭痛がマシになっている。エンジニアチームが諦めてくれたのだろうか。頼むから翌朝また頭痛がするなんてことは止めて欲しい。本当に。

「お、そろそろか」

水も程良く貯まり、蛇口の栓を閉める。

「もう水槽倒しながら出てくるんじゃないぞ」

水槽の上に蓋をしながら、洗面所から出てクジラを机の上に置いた。

◇

「…というのが、我々が就寝中に起こった出来事の様だな」
「フェストゥムが動物の様な挙動をするとは…」
「解剖させてくれないかしら」
「それは流石に無理じゃないかしら…？」
　早朝の作戦会議室には少数の人員が集められていた。司令官の真壁司令に溝口さん、エンジニア代表として羽佐間さん（本来であれば小楯さんが呼び出されていたが、漫画の〆切まで間近ということで代わりに呼び出されたらしい）、医療チームからは遠見先生、近藤さんに、そして僕だ。
　石上榊を島に受け入れる上で少なからずの反対があった。
　途中の記憶が無いなんて怪しい、嘘を吐いている可能性もある、フェストゥムが島にいるなんて安心できない。
　島内では彼の受け入れについて賛成派が六割、反対派が四割といった構造になっていた。反対派は特に後者の理由で反対している者が多い。

それを受けて真壁司令は一週間の様子見期間を取ることを提案し、反対派はそれを受け入れた。
様子見期間中は極力アルヴィス内部から出さないこと、部屋に取り付けた監視カメラで様子を見ること。
不穏な挙動があれば彼とフェストゥムは島外に追放すること。
「今の所は大丈夫そうだな」
「このままでいて欲しいものだ…。さて、マークニヒトの解析結果から聞こう」
「はい。残念なことに一向に解析は進んでいない状況です。せめてログでも閲覧できればと思いましたがそれも出来ていません」
「そうか。引き続き解析を頼む」
「了解です」
羽佐間さんたち、エンジニアチームが榊の搭乗していたマークニヒトをブルクへ運び、解析作業をしていたが一向に進まないのが現状だった。現在は破損したファフナーの修復で人手が少ないことから、修復作業が終わればエンジニアチーム全面がマークニヒトの解析作業に移ることになる。
「そして彼の検査結果はどうでしたか」
「…到底ファフナーに乗れる適性では無かったとだけ伝えさせていただきます」

「……なるほど」
「こりゃ確定したってことか？」
「そうは思いたくはないのだがな…」
真壁司令が目を瞑り、遠見先生の伝えた検査結果によって予想が当たりへと近付いてくる。
「やはり…コア、なのでしょうか」
羽佐間さんが声を震わせながら言った。
彼の話した経歴ではマークニヒトに搭乗した後から記憶が無く北極にいて、人類軍に追われながらクジラというフェストゥムと共にここへやってきた。
問題なのは北極にいてクジラと共に追われながら過ごした期間だ。
ファフナーに乗るには相応のサポートが必要だ。機体の点検、パイロットのメディカルチェックなど、パイロットがファフナーに乗って生きたまま降りてくるにはそれらが決して欠かせないものだ。これがザルヴァートルモデルという、他の機体に比べて慎重な運用が必要とされる機体であるなら尚更に。
しかし、彼の現状を考えるとそれらを行えるとは思えなかった。唯一出来そうな勢力である人類軍には追われている身であると本人が言った。
…それがどこまで真実なのかは僕たちに確かめる術はない。人類軍から送られてき

たスパイという可能性も、僕らが認識出来ていないだけで外には第三勢力が現れており、そのスパイという線もある。

だが、そうではないとしたら導き出される答えはある。

石上榊自身がマークニヒトのコアであること。蓬莱島の行っていた研究と結び付ければ考えつくことだった。

そうであれば榊はパイロットではなくファフナーであり、意識を持ったままファフナーを動かしているということになる。それならサポートを受けずとも活動が可能ということにも繋がる。

「すまないが、皆城くんには彼の案内を頼む」

「分かりました。では、僕はこれで」

「ああ」

彼に怪しい行動があればすぐに報告する。

決して島の不利益には繋がらせない。

そう決意を改めてその場から退出した。

第１４話　食事は意外と必要

「いいかクジラ。『人を殺さないこと』、『今まで以上に人や物や施設は同化しないこと』。これら二つは守れるか？」

「ーーー！」

「よし。そうでなければ俺もお前も……あのアルヴィスの飯が食べられなくなる」

「ーーー！ーーーーーーーーーーーーー！ーーーーー！」

「嫌だよな？　俺も嫌だ」

午前六時に起床し、記憶を整理しながら考えていたことをクジラに話していた。

ちょっと監視カメラのことも考えて、洗面所で真剣そうにアルヴィスの食事について話す俺達はお笑いものだろう。

食事。

その重要性に気が付いた時は、それが過ぎた後のことだった。

自分の記憶整理中で気が付いた。

俺はコアになってから人間食を一切食べていない。食べる必要が無くなったからだ。
昨日は何となくで鮭の塩焼き定食を注文して食べていたが…。今思うと食事って凄く久しぶりのことだった。
他の一般的なファフナーだったならどうなるかは分からないが、周囲の微生物すら同化して動力に変えるエンジンを持つザルヴァートル・モデルに搭載された今ではエネルギーは摂取しなくても稼働することが可能だ。
つまり、今の俺に食事は余分なエネルギーを摂取する行いだ。
しかし、とてつもなく重要なことだった。物を噛んで咀嚼する行為が当たり前じゃなくなった時にやっと気が付いた。
考えてみれば今の所、衣食住が保証されているのは人類軍本部か人類軍基地、それからアーカディアン・プロジェクト産の島だけだ。人類軍には追われているし、基地の食事は出ても味気の無い携帯食料ばかりだ。新鮮で多彩な野菜類や豊富な魚類や肉類を扱う食事にありつけるのはヘスター・ギャロップら上層部の人間しかいない。
竜宮島では上層部関係なく、美味しい食事が食べられる。海に囲まれた島なので必然的に海洋系の食事が多いが、それは蓬莱島の時でも変わらないので問題は無い。植物プラントで栽培されている植物も大体同じものだと思われる。
「これで酒もあれば十分…。いやでもここは蓬莱島じゃないから購買するのも飲むのも

難しいか…。いつか飲ませて欲しい…いや、お前にも飲ませたいな」

蓬莱島の時では母が酒豪だったのと、俺の事情を汲んでくれた婆さんが融通してくれてたもんだからいくらでも飲めたものだったけど…。飲み過ぎてコアにしかめっ面もされた時もあったけど…。

はぁ、と強めに息を吐きながらクジラの入った水槽を抱き込む。酒が飲めなくても食事をするだけでこんなに満たされている。自分でもこの感情の荒ぶりが制御できない。

「鮭美味かったな…」

熱々の白米に程よく塩が振られた鮭、漬物、味噌汁に冷たい冷奴…。それらを食べていると、クジラが物欲しげに見ていたから水槽の蓋を開けて鮭の切り身をあげた。

暫くしてクジラが「不思議な味がする…！もっと寄越せ！」と言ってきたので鮭の半分はクジラに持っていかれた。

周りの大人が驚愕した目で見ていたが気にしないことにした。溝口なんてぽっくり口を開けて驚いてはタンクトップを着た女性に小突かれていた。

「いいか。約束をちゃんと守れば俺達は無害だとアピールできる。あ、約束にこれも追加だ。

『竜宮島の防衛に協力すること』だな。俺達の有用性を見せれば、島にいるファフナーパイロットたちの負担も軽減出来るのと、島民から信頼を得られる筈だ」

「ーーーー!」

「物分かりがよろしいようで…。さ、長く話していると不審がられるから出ようか」

清々しい気分で洗面所から出て、机の上にクジラの入る水槽を置いた。夕食の終わりに溝口に今の部屋に案内され、「指令が出るまで部屋を出るな」と言われたのでクジラの観察でもしていよう。

クジラはグロテスクな口を開いてはフッと突き出す形になって泡を作り出していた。何らかの遊びのようで、何連続出来るのか試しているみたいだ。

椅子に座り、クジラによって揺れる水や泡を見ながら俺達の状況を確認する。

部屋とは言われたがここは完全に隔離部屋だ。出入口のある壁はガラス一面張りで俺達の状態は丸見え。隅には監視カメラが設置されている。

受け入れたようで警戒はされている。指令とやらも来る気配はまだ無さそうだ。

今の所は相手側からのアプローチを待つ他ないので暇だ。あの頭上からの視線も感じず、人類軍からの追撃も来ない。目の前の水槽でクジラが悠々と泳ぎまわるのを見ているだけの時間。

しかし、暇ということは悪いことじゃない。何にも焦らずに考えられる時間がある、余裕がある。それは希少なことだったんだとコアにされてからは実感した。意外と蓬莱島での生活は穏やかな方だった。帰れる家があって、フェストゥムにも人類軍にも追

われない。それだけでも安心できる環境になるのだと。
自分の手を見つめてみる。蓬莱島での俺の態度を顧みて、あのままの態度では駄目だと思い直した。
今度はああならないように。飲んだくれでろくでなし、努力もしないような奴から変わろう。
クジラに対する意識改革に無害アピールを進んでやる。それから人との距離の取り方とかもだ。しっかし、後者に至ってはあまり自信が無い。大体同年代問わず、一応設置されていた学校に通っていた奴等には睨まれていた記憶しかない。
ただでさえ島というのは閉鎖的なんだ。嫌な感情よりも良い感情を持ってもらった方がお互いに心身健康でいられる筈だ。なるべく丁寧な受け答えに当たり障りない会話。これを目指そう。笑っておけば何とかなるってどこかの漫画に描いてあった気がする。
これからの身の振り方を考えていたその時、コツ、コツ、という足音が廊下側で聞こえた。クジラから視線を外して音のする方へ振り返るといつぞやかに見覚えのある薄茶色の髪をした少年がいた。左目には特徴的な傷がある。
…あれ？よくよく感じると人じゃない？フェストゥム？いや、それよりも微弱な反応…コア型？いや、それだったら島のコアになっていないか？俺の知る限りでは竜宮島の

コアは女性の筈だ。
「君にアルヴィスの各施設を案内する。皆城総士だ」
「石上榊です。よろしくお願いします」
とぷりとクジラが泳ぎ回った。

◇

皆城に聞けばクジラも同伴して良いようだった。なのでクジラを持ち歩いてアルヴィスの内部を案内されている。とは言っても作戦会議室、食堂、廊下、休憩室など、一時島の情報を入手した時に知っている場所ばかりだ。皆城からはこういう部屋名でこういう機能がある、みたいな一種の機械的に近い説明をされている。中々ウェットな会話というのが出来ない。
「ここは水上展望室だ」
「どういった時に使う部屋ですか？」
「特には無い。景色のある休憩室だ」
「なるほど」
すいーっと魚たちが泳いでいる。その奥の方に白いファフナーが見えた。いや、ファ

フナーというにはあまりに大きすぎて操作出来やしなさそうなものだった。
「あの奥の方に見えるものは？」
「エーギル・モデル、またの名をゼロファフナーともいう」
「へぇ、名前から考えると最初期に作成されたファフナーって感じですか？」
「そうだな」
「でもあの大きさだと一人で動かすには無理がありそうですが」
「二人で同化現象を分かち合いながら操作するものだ」
「なるほど」
　二人でファフナーを操縦するとか蓬莱島では考えられないことだ。ファフナーを操縦できるほどシナジェティックコード形成値が黄金比に近い奴がいるのといないのだと、こうした兵器研究の考え方とかも変わるもんなんだな。
　俺がそう返した後から会話が無い状態が続いていたが…。
「蓬莱島と竜宮島ではアルヴィスの構造は違っていたのか？」
　相手側から話がやってきた。これはチャンスだ。
「ええ。島の地形とかも関係しているのでしょうか。主要な施設は変わりませんが、部屋の配置や距離などは違っていますね。それからこの部屋もありませんでした」
「そうなのか」

「そうですね?」

……。

そこからは互いに何も言わず、どこにも移動せずゼロファフナーを見つめる時間になった。

思わず浮かべている笑みが引き攣りそうになる。

「おいおい、あの様子じゃ打ち解ける以前の問題じゃねーか?」

「そうね。不器用な総士に案内を任せたのが敗因よねぇ…」

後ろの方から小声で何かが聞こえてくる。隣の皆城にも聞こえてきたのか、僅かに咳払いをした。

多分隠れているつもりなんだろうが、俺からすれば生体反応で丸分かりだ。…いいや、姿も丸見えだった。センサー使うまでも無かった。

「他に何か質問はあるか」

「では、竜宮島の魅力を教えてくれますか?」

「…今までのことについての質問は無いのか」

「ええ。基本的な場所は蓬莱島の施設と共通していることが分かったので特には。気に

なるようなことも大体その場で聞きましたし、それなら今の内に現地の方から島の魅力でも聞こうかと」
「良いだろう。その代わり、君の島のことも教えてくれ」
「構いませんよ」
　水上展望室に設置されている席に座る。隣には抱えていたクジラの水槽を置く。
　一度は来て見て回って襲ったこともある島だが、現地の人ならでは面白スポットがあるかもしれない。
「何とか大丈夫そうだな」
「ほら剣司。そろそろ検査の時間だから行くわよ」
「おおい、待てよ咲良」

◇

　あれから長いこと皆城と話を進められたが、「そろそろ別件があるんで回収するぜ」という溝口によって終わることになった。
　結局その話の中でも彼の違和感については聞けなかった。出会って初日で「貴方フェストゥムですか？」と聞くなんて出来なかった。相手にとんでもなく失礼だ。

「お前さん、昨晩はソイツに飯やってたが本当に食ってんのか？」
「食べてますよ。味の感想も言ってますし」
「味って、フェストゥムに味が分かんのかぁ？」
「分かりますよ。な、クジラ」
「ーーーー！ーーーーー！」
キュイィ！という鳴き声を出しながらクジラが泳ぎ回る。ははあ、他の種類の料理も食べたいと。
その様子に溝口は訝しみながらクジラを見て、次に俺の方を見てきた。
「お前さんには何言ってんのか分かんのか」
「まぁ、大体は」
「へぇ、じゃあこれとかどんな評価だ？」
溝口がポイっと投げてきた物を咄嗟にキャッチする。感触としては小ぶりな袋に入っている飴玉みたいなものだ。手を開いて確認すると、それはのど飴だった。レモン味で喉がスーッとするタイプ。
渡してきた意図を確認するために溝口の方を見るが、にんまりと笑いながら見ている。
確かに、こののど飴をクジラがどう思うのかが気になる。俺は小袋からのど飴を取り

出して水槽の蓋を開ける。クジラは小袋を開けた時から期待するように俺の手を見つめていた。

俺は望み通り、手の中ののど飴をクジラのがぱりと大きく開いた口に落とした。すぐに口は閉じられ、暫く咀嚼するように口を細かに動かした。

「ー、ーーーーー！ーーー！ーーーーーーーー！ーーーーーー！」

「駄目みたいです」

「良い余り物処理になったぜ」

「ーーーーー！」

溝口が笑いながら先を歩き、クジラが水槽で暴れまわるのを見ながら俺はその後を追いかけた。

そして案内された場所は先日検査を受けた場所でもある医務室だった。

第15話　迷情

竜宮島内で子供たちが夏休みを謳歌する中、美羽は自宅の縁側で絵を描いていた。
白い画用紙には黄色いクレヨンで魚の様なシルエットが描かれている。その隣には黒い人のような形の物体がいる。
美羽はその周囲にある白紙の部分をがさがさと青いクレヨンで埋めている。
後ろからは母親である弓子がやってきた。
「あら、美羽ったらお絵描きしてるのね。これは……なにかしら？」
弓子は黄色い魚を指した。
（隣の黒い物体が人だとして、こんなに大きな魚なんていたかしら……？）
「それはね、クジラさん！クジラさんから色んな”おはなし”を聞いてたの！」
”おはなし”？これは……クジラさんってお魚さんとお話しているのね？」
「うん。海が広いーとか、さかきっていう人について！　美羽、二人に会ってみたーい！」
「え、えーと……。いつか出来るわよ。ええ……」

弓子は眉を下げながら、会いたいと駄々をこねる美羽を抱きしめる。

”さかき”というのは、最近島に来た人物――石上榊のことだ。そして、クジラさんというのは恐らく石上榊の傍にいるリヴァイアサン型のフェストゥムのこと。

つい最近まで、美羽はボレアリオスミールと対話していた。今はこうして無事な様子を見せているけれど、一時は体が赤い結晶に包まれた。

……またあんな思いをしなければならないの？

美羽がフェストゥムと対話が出来る人物だということは弓子自身がよく知っている。美羽を通して人類がフェストゥムと和解した瞬間を直前で見せられては、その事実を飲み込むしかない。

だがしかし、石上榊という人物には人類軍か竜宮島が認識していない第三勢力から送られたスパイの容疑が掛かっている。彼の傍にいるフェストゥムだっていつ暴走して美羽を、人を同化するかも分からない。

それでも美羽は会いたいと言っている。出来るなら美羽のお願いを叶えてあげたいと思うが……。

（……道生と相談してから司令に伝えるべきかしら）

自分では考えが煮詰まってしまいそうだった。

◇

パソコンの前に座り、何かを記入していたらしい女性がこちらを向いて笑った。
医務室にいた女性、確か遠見先生と呼ばれている人の前に置かれた椅子に座らされ、
「じゃあなー」と言って溝口が退出していった。
遠見先生の前に座り、膝の上にクジラを置いた。……もしかして、先日の検査結果がもう出たのか？
「石上くん、昨日はよく眠れたかしら」
「はい。ええと……一体、何の用事でしょうか」
「先日の検査結果の報告よ」
「なるほど」
遠見先生は検査結果を教えてくれた。
「染色体に異常が発生していないの。あのザルヴァートル・モデルに乗っていてこれは凄いことよ」
その言葉に薄く笑って返した。「体組織が結晶体構造よ」と返されることを構えていたが、染色体に異常は無いときた。
遠見先生の言葉をそっくり受け取るのなら俺は完全に人間の肉体を持っていると考

えていいのだろうか。そもそも、目の前の人が本当のことを言っているのかが不明だが。

……それにしても、あのザルヴァートル・モデルと呼ばれているのか。何だか複雑だ。人類軍の方でも乗れば人の命を食べるとか噂されていたからまぁ……、どちら側でもそう忌々しく言われるものか。

でもこればっかりはどうしようもない、俺でも制御できない。

「けど、体に不調があるならいつでも言って頂戴ね」

「はい」

「それから血液型はＡ型で合っているかしら」

「ああ、はい。多分合っています」

血液型もあるのか……。そうなると何故俺が霊体の時と変わって肉体を持てるようになったのかとか、どうやってそれを切り替えているのかが気になってくるな。大体幽霊になりたいと思えばなるし、肉体の方になりたいと思えばなれる様だけど。

それから遠見先生は身長とか体重、生年月日などは間違えていないかと確認してきたが全部「はい」だ。これに関しては誤魔化す余地も無い。（生年月日についてはうろ覚えだが）

「これで検査結果の報告は終わりよ。それで、ここからが本番なのだけれど」

「はい？」
「この前は身体検査を受けてもらったけれど、今回は心理テストをしていくわ」
「心理テスト？」
「ええ。竜宮島ではパイロットに選出されたら必ず行うことよ」
ふむふむと頷きながら、遠見先生は立ち上がった。
どうやら場所を移動するらしい。

◇

連れてこられたのはアルヴィスの作戦会議室。
席を指定されて座ると、コンソールの画面が出てきた。
「今コンソールに表示している曲や小説、絵画などの作品の中から特に自分が共感するものを選んでね」
「分かりました」
曲の鑑賞用に渡されたヘッドホンを装着しながら、その作品たちを見てみる。
どれもこれも海に関係している作品のようだ。
（小説はまだしも分かるが、絵と曲？どうやって共感するんだ？）

コンソールで表示された作品はあまり自分が手に付けない、というか多分読まないし見ることもない作品ばかりだった。

曲や絵に共感というのが分からないので、まずは手始めに小説から読むことした。

選ばれている作品のテーマが海のせいか、よく鯨やイルカが出てきた。鯨に復讐する話とか、若い漁師と海女との恋愛ストーリーとか、潜水艦に捕虜として連れてこられた三人がその潜水艦から脱出するとか。

その中でも鯨と同じ夢を見たいという人物の小説はなんとなく共感が持てたのでその作品を選んだ。

次に、曲の鑑賞をしてみたはいいものの、出だしが静かに始まるのがクラシックという曲の特徴なのか、としか思い様がなかった。

それから長い。曲の構造というのが関係しているらしいが、長いとしか思えない。盛り上がったと思えば盛り下がるし、盛り上がるまでに凄く時間が掛かるし。

……適当にちょっと好きかなと思った曲を選んでおいた。

最後に絵画。

日の出の出ている海、二人の子供が海辺で遊んでいる絵、海辺でパラソルを持つ女性。

大抵ヨットや船、女性が出てくるものばかりだ。他に題材とか無かったのか。

どの絵も何となく違う気がするので、どんどん絵画が表示されている画面をスクロー

ルしていく。
（これは……）
出ているのは岸のみで、夕日とその光りで照らされた雲が広がる絵を見つけた。
他にも探したが、結局その絵ほどしっくりと来なかったのでそれを選んだ。
共感というか、自分の好き嫌いで選んだのは良かったんだろうか。
ちらりと向かい側に座っている遠見先生を見ると、気難しそうな顔で俺が選んだ作品群を見つめていた。
そしてパパパと指を動かしてこちらを見た。
「以上で心理テストは終了です。次はメディテーションをしてもらいます」
「メディテーションですか？」
「そう、ファフナーと一体化する感覚を学習できるコクピットに入ってもらって、自分の心のありようを知ってもらいます」
「心のありようですか？竜宮島には凄い訓練があるんですね……」
心というか、精神面での訓練ということだろうか。
痛みに屈しない精神とか、外敵――フェストゥムが来ても驚かない肝が必要なのだろうか。
メディテーションとつくから、何かのイメージでも体験させられるのか。

（出来れば痛いのは止めて欲しいな……）
「移動続きで申し訳ないけれど……。そのコクピットに案内しますね」
「あ、はい」
横の机に置いといたクジラを持って、また部屋を移動した。

◇

俺の予想とは逆に、メディテーションとやらは穏やかだった。
いや、この瞑想に入るまで実に長い時間が掛かったのだが、何とか瞑想している状態にはなった。
俺は海底に立っているらしい。光が差し込んでいるのなら底が浅い気もするが、周囲は深海魚でも出てきそうな暗さだ。
何らかの魚類が泳いでいるという訳でも無い。何の生物もいない。そんな海域なんて聞いたことも見たことも無い。
（というか、海の見える場所で心の訓練をするってどういうことだ）
遠見先生からは自分の心のありようを知る為とは言われたが、その為にはどうすればいいのかが分からない。

取り合えず足を進めると、やけに足元に石があることに気が付く。先程からごつごつと足裏や爪先などに当たって痛いくらいだ。

なるべく踏まない様に進みたいところだが、そうはいかない。海域の暗さによって、石がある場所の予測が付かない。

それに、俺は毎回このような海を泳ぐ際にはナイトビジョンを機能させていたのだが、今はまったくその機能が使えない。この暗い視界で石を踏んづけながら歩くしかないようだ。

少し歩いた先には俺より高い全長と幅を持つ石が転がっていた。

不思議なことに、その石だけは上から光が差している。その下の隣に、こぶし大程度の大きさの石がその石に寄り添うかのようにあった。

（……）

無性に腹が立つのでその石を突く。だが、水中での人間体では思う様に体が動かない。

その石に手が触れるだけだった。

きっとファフナーの俺であればこの石を破壊するのは容易だろうに、今はその体を呼ぶことが出来ない。同期することも出来ない。

俺はその石を見上げる。石は何も言わずに光に照らされているだけだった。

石だから当たり前だ。けれども、その石が俺を見てせせら笑っている気がする。
人の姿をしていれば、きっと腹を抱えて笑い転げている。憎たらしい顔付きで俺を見ている。
この石だけは破壊したい。これを破壊しないと俺は、俺は――！
……そこまで考えてハッとなった。
（この腹の立つ石に対して心を乱さないというのが訓練の内容だったのか！）
心のありようを知るということ、つまりは心をいかにして制御できるかということか。
だったら俺は失格だ。心を速攻で乱してしまった。いや、パイロット云々の前にパイロットが乗るファフナー自体なんだけど。
いや、それを抜きに考えて……。
（竜宮島のパイロットはこんなことを要求されるのか……。いや、それも当たり前か。パニックになって敵が倒せない、なんてことになったら本末転倒だもんな）
あのザインのパイロットや通信時に応じた女子もこのような訓練を受けてきたんだろう。それ以外の、この竜宮島にいるパイロットたちも同じく。
石をじっと見る。苛立ちが募るが、ここは心を落ち着かせるのが正解だ。
大きく息を吸って、吐く。水中なのに深く深呼吸しても肺に水が入らないことに驚き

ながら石を見つめる。

……。やっぱり駄目だ。とても腹立つ。破壊とまではいかないが殴り飛ばしたくなる。

◇

コクピットが開けられる音が聞こえた。デニムのジーンズが見え、次に豊かな茶色の髪が見えた。

短髪で、にやけた男の顔ではないことに安堵した。

「お疲れ様。良ければ、メディテーションで見えた光景を教えて貰えるかしら」

「光景ですか？」

「ええ。メディテーションでどのような光景が見えたか、それによってパイロットたちの心象を把握するのよ」

……。

思いっきり間違えた。心を制御とかそういうことじゃなくて、俺がどんな風景が見えたかが重要だったのか。

「……海底にいました。足元には大量の石が積んであって、周囲は深海のように暗かったです」
「他には、何かあったかしら？出来ればメディテーションで見えたこと全てを話してちょうだい」
「全てですか……」
　こっちが勝手に勘違いしてたことは言わなくても大丈夫だよな？後、石に感じた苛立ちとか。
「他には、少し歩いた先に自分の身長を越す大きな石が転がっていました。その石の隣には俺のこぶし大程度の石が転がっていました。後、大きな石の方には上から光が当たっていました。
　これくらいですね」
　遠見先生は真剣な様子でバインダーに何かを書き連ねている。
　このまま寝転がった態勢でいるのも失礼かと思い、上体を起こした。
　そして、バインダーの上に遠見先生が二冊ほどの本が乗っていることに気が付いた。
　一体何の本なのか。もしかして、読まなければならないとか……？
「……はい、これで心理テストとメディテーションは終わりよ。協力に感謝するわ。
　そろそろいい時間ということで、解散。……の前に」

遠見先生は本を一冊俺に渡した。『変身』と大きく書かれた本だ。
「この本を読み終えたら医務室に来て欲しいの。そこで感想とかも聞かせて欲しいわ」
「は、はい」
何だろう。思わず手に取ったはいいものの、戸惑いが隠せない。
遠見先生ってこんな本を渡してくる人物なのか。
疑問に思いつつも、その本を持って地面に置いといたクジラを回収した。
クジラはいつも通りに泳いでいる。それに何だか安心した気分になる。
「食堂に行こうか。昼食食い損ねたもんな」
「ーーーーー」

第１６話　またの名を理想郷

ある程度の生活リズムも定まってきた頃、俺は暇な時間に遠見先生から渡された本を読んでいた。

監視カメラのついている室内で読むのも良いが、如何せん殺風景だ。なら、一応出歩くことのできる水中展望室のベンチにでも座って本を読もうと思った。

それで『変身』という話を読み終わった。とにかく胸糞の悪い終わり方をした。

一体何を思って遠見先生はこの本を渡してきたのかが分からない。内容が内容なので、漫画の様に読み返そうとも思えない。

とんでもなく気分が悪い。でも感想を言いに行かなきゃいけなかったんだっけか。

どうする。このまま最悪な気分になったと感想を伝えるのか。

遠見先生はもしかしたら、この本が好きでオススメしたくて渡した――とまで考えて、そんなことはないよな。考えが落ち着いてきた。

胸で虫がのたくりうつような気持ち悪さを抑え付けた。

多分、これも心理テストの一種だ。この話についてどう思うのかとか、共感したポイントなどを聞く。そして、俺の人となりを判断するものか。

わざわざ人が虫になった話を持ってきた。もしかすれば、俺が蓬莱島で加工されたコアであることに気が付いたのか。まだ判断途中なのか。

感想はそれとなく、誰もが思う感想を言おう。とても気分が悪いではなく、普通にどうして虫は幸せになれなかったんだろうとか、そんなことでも答えておけばいい。……この話を書いた作者の意図は考えないものとして。

酒でこの気持ち悪さを押し流したい。こういう時はいつもより度数の高い、焼酎とかに手を出してみるのがいいんだ。

なんなら浴びる様に飲んで気絶したい。頭を痛めながら朝を迎えたい。

もちろん、石にならず、いつも通りの寺の中で。井草とむせ返る程強い酒の匂いを嗅いで布団か、居間かで起き上がる。怠い体を起こし、無くなった酒を山の麓にある酒店で買いそろえて戻る。

意識がはっきりしてきたのなら墓場の掃除。たまに墓参りにくる奴もいるが、基本的に墓場に人は来ない。俺が管理しておかないと汚れたままというのも気分が悪い。

自堕落に飯を食って、酒を飲んで、寺に籠って、墓場の掃除をしているだけの生活が欲しかった。

そこに他人の生死は入ってきて欲しくなんて無かった。他人は他人で、俺は俺。それでいい筈だったんだ。

どうして俺が石になる奴をアルヴィスに連れて行かなければならなかったのか。それはもう、一重にクソ野郎の趣味だ。そうに違いない。

「ーーーーーーーー」

キュゥイという音が聞こえた。

（……そうだよな。酒は逃げだ）

クジラの声が聞こえた。そうとは言っていない、俺を気遣った声だった。

でも、それで逃げそうだった意識を止める事が出来た。

酒を飲まない――逃げることのない様にしようと考えたのは自分だ。気分の悪さだって何時間かぼーっとして日を過ごしていれば消える筈だ。

（そろそろ……、向き合うべきかもしれん）

酒と同じく逃げ続けていた”こと”について。まず俺が変わりたいと思うなら、根本的な物をどうにかしなければならない。

◇

そうこう考えている内に三日は過ぎた。遠見先生には一般的な感想を伝えてからは何も動きがない。時折溝口が食事の時に隣にやってきてはクジラに色々と与えている

程度。それから記憶領域へのアクセスが完全に途切れた。これは嬉しい。

竜宮島としては俺の状況を考えあぐねているのか、判断しかねる事態になったのか。そろそろはっきりさせたい。

恐らく遠見先生――というか、アルヴィス内で医療に従事している大人はアルヴィスの中でも重要な位置にいる筈だ。兵器を発展させるなら、医療技術もそれ相応に。吐き気を催す男の口癖だが、理に適っている。

ということで、夜が明けたら遠見先生の元に行って揺さぶろう。

こっちは開き直ってコアだと言えばいい。追放されても何も問題はない。何なら数日視線に悩まされずに三食食べて過ごせただけで十分だ（クジラにゃ悪いが……）。良い休憩地点だったで済ませられる。なんなら変わろうとして禁酒の誓い的な物を立てたが即効で破れてお得だ。

けれど、出来るならミツヒロに同行した時の様に、普通の竜宮島っていうのをもう一度見たかった気がする。皆城から話された情報を聞いていたら更にな。

今年はもう過ぎたようだが、夏には宇蘭盆をやるらしい。俺の知っている盆ではなく、どちらかというと漫画やアニメに出てくる夏祭りっぽいらしい。屋台が並んで、楽し気な人の声が絶えない……らしい。

だが、この祭で大人達が――第一種任務に従事している者たちが重視しているのは灯

篭流し。灯篭に戦いや研究の最中で亡くなった人物の名前を書いて流す。いつまでも人の死を忘れない為に。

辛気臭い経より涼やかで、――死者を悼む行事なのが皆城の表情から伝わった。

まるでアーカイブで見た通りのような、アルヴィスの設計思想を体現したような平和の島。

それにもう少しだけ触れてみたいと思ったのは、間違いか。辛いのと羨ましいのもあったが、今は違う。島の空気のせいだろうか。

しかし……、島を出ることになれば竜宮島のコアと交わした約束が果たせなくなる。

じゃあどこにいても呼べば来るよニヒトくん的な物でも作っておくべきか？　一応約束だけは果たしたい。

だが俺にそれを作れる技量があるかというと……、ない。咄嗟に出たのは「この島のエンジニアチームに頼んでみる」だが無理だろう。

俺の記憶の中にいる筈だろうエンジニアの技量を持った奴の記憶が。そこからどうにかして技術を持ってくることが出来ないか？

記憶の……サルベージは……。サルベージは出来る。エンジニアの奴を乗っ取られている時に同化していたからその記憶はあった。だが技術までは無理だな……。

根っからの文系に機械系統は無理だ。なんなんだあの文字の羅列と基盤の数は。手

が竦むぞ。

というかどこにいても呼べば来るって、どんな機能持っていればそうなるんだ？

現実的に考えて無理じゃないかこれ。

えぇー……、どうすりゃいいんだ。

唐突に湧き出た問題に寝ながら苦戦するということをしていたが、無事に時刻は朝を迎えられた。

今日も俺は監視日和。監視カメラのレンズがキラリと光るってな。

「石上くん、ちょっといいかしら。その、クジラさんも一緒に」

「はい、何か用でもあるんですか？」

「ええ……そうね」

これはラッキー。鴨がネギ背負ってやってきた。でもその後ろからヒグマが護衛として来てやがる。

ヒグマもとい溝口と食堂で見かける溝口と同じくタンクトップを来た男性。どちらもタンクトップではなく、物々しい装備に身を包んでいる。

溝口はおちゃらけた感じだが目の鋭さはひしひしと伝わるし、隣の男性からは警戒心が隠しきれていない。いや、むしろ出してこちらを牽制している。

そんな空気にいれば自然と無言にもなる。……念のために機械の俺の方とも視界を

共有。

おっとぉ……、手足が拘束されている。こっちにはエンジニアとファフナーパイロットが数名いる様だ。

とうとうって感じか。間違ってもコアの破壊とか、人間の俺の殺害とかされないといいけどな。コアの破壊は本当の俺の死を現すだろうから。

「石上くん、一つ聞かせて欲しいことがあるの」

「なんでしょう」

今まで背中を向けていた遠見先生が振り向いた。移動が止まる、というか目的地はすぐそこ。

最初に対談をした部屋だった。

「貴方には、この島がどう見えたのかしら」

「……そうですね」

青く澄み切った空に人の笑顔が絶えない。でもまぁ、その反面とでも言うのかフェストゥムや人類軍に狙われている。

蓬莱島は二回目の人類軍侵攻とフェストゥムの襲撃が重なって滅亡したが。

竜宮島は攻めにも防御にも転じられて、なるべく島の平和が守られていて、そして島民が周囲の人間を思いやっている。竜宮島に触れるのは数少ないが、それは強く感じ

た。

一体どこで差が付いたんだろうな。同じ日本人で同じアルヴィスに乗って逃亡してきたのに。真壁史彦と――――倉津創一はどこが違った。

……それは未だに分からないが、一つだけは言える。

「まるで人間が考えうる限りに再現した様な……楽園ですかね」

第１７話　ようこそ竜宮島へ

「これまでの行動に怪しいものは見られませんね……」
「フェストゥムの方も大人しいっちゃ大人しいしな」
作戦会議室、そのモニターで流れているのは石上榊の映像だ。フェストゥム――榊の言葉からはクジラと呼ばれる個体の水の入れ替えをしつつ、何処へ行く訳でも無く部屋で待機していた。
どこへ行くこともなく、クジラと戯れながら――時折寄越される視線から監視されていることは気付かれているだろう。
こちらで一方的に定めた期間の一週間はもう終わる。
これまでの行動に何も問題はない。島の反対派も少しは軟化しており、石上榊の受け入れには何ら問題はない。
しかし、はっきりさせなければならない。
――彼がファフナーのコアであるのか。何らかの組織に所属しているのか。
後者は一週間程度で気付ける問題では無いので、これから地道に探りつつ……という

方針ではあるが、やはり問題となるのは前者。

一度、竜宮島はフェストゥムに同化されたマークニヒトに襲撃された結果、皆城総士を北極のミールへ拉致されている。蒼穹作戦に参加した戦士たちからは隊列を分断され攻撃を加えられたとも聞いている。

あのマークニヒトがフェストゥムに同化されたままならば、今の様に意思を持って行動している石上榊は何者だ。

それを問いただすに当たって、マークニヒトの拘束と監視をエンジニア班が担当し、暴走した際の鎮圧の為に出撃準備可能のファフナーを配置した。

ファフナーは、島内で唯一マークニヒトに対抗できるマークザインと他二機。

真壁一騎のマークザイン搭乗には反対もあったが、本人の強い意思によって半ば押し切られた。彼の父親の苦労は計り知れない。

対談の場にはアルヴィス総司令真壁史彦と特殊部隊が警護に付く。

この場の誰もが、何事も起きなければいいと願っていた。

◇

扉が開いて、姿が現れる。

クジラの入った水槽を抱える黒い僧服の少年、石上榊。彼は銃口を向けられていても、その自然な体が崩れることは無かった。

榊を案内した遠見千鶴はここで別れ、真壁史彦の真向かいにある席に榊は近付く。

掛けてくれという一言で席に座り、溝口達が背後に立つ。

暫くの間、誰も何も喋らなかった。クジラが自由に泳ぐ水音が響いた後、その静寂を壊したのは榊であった。

「私の行動で、何かおかしい所でもありましたか」

「いや、君とクジラの行動に何も問題はなかった」

やはり気付かれていたか、と特殊部隊たちの警戒は跳ね上がる。

このまま黙っていても何も事態は動かない。本来の目的も達成できない。

ほんの少しの緊張を持って真壁史彦が口を開く。

「君は……、石上榊はファフナーのコアなのか？」

その言葉に顔を伏せた。溝口達の銃を握る手に力が籠り、標準を合わせていた。

「正解です。いつ気付きましたか」

顔を上げた榊は僅かに笑っていた。

「早い段階で検討をついていたが、確信が欲しかった」
「そうですか。はい、今の俺はマークニヒトのコアです」
今まで硬く閉ざした口は何処へ行ったのか、言葉には軽さが見えた。
得体の知れない気味悪さが覗く中、真壁史彦は視線を強めた。
この話はエンジニア班にも中継がされている。画面の向こうで誰もが固唾を飲んでいた。
「君はマークニヒトを手に入れたと言っていたが、それは嘘だったという訳か」
「手に入れるも何も、マークニヒト自体が俺ですから」
「では、蓬莱島の島民だったという話も？」
「そこは事実です。俺は蓬莱島の人工子宮で生まれて育った、蓬莱島の人間です」
確認の為の質問であるが、蓬莱島の島民であったことは本当だ。三ミリほど下がった眉とトーンの低くなった声がその証拠でもある。
「では、君に聞こう。君の機体――君がフェストゥムに同化され竜宮島へ襲撃してきたことがある。その時、君は何処にいて、何をしていたのか」
真壁史彦の眼光が榊に強く突き刺さる。
「その時、俺は竜宮島のコアによって俺に掛けられた制限を解いてもらっていました。それから指揮系統を取り戻した俺は海の方で自爆……してましたよね？」

「あぁ、海の方でマークニヒトは確実にフェンリルを起動させていたな。そうか、あの動きは君が……」

「竜宮島への襲撃、いえ……機体（マークニヒト）が同化されて奪われた件については俺の失敗も同じです。申し訳ありませんでした」

流れる様に頭を下げる直前、そこから見えた表情は真剣そのものだった。

少しの間呆気に取られた後、真壁史彦は一つの決意をした。

「……顔を上げてくれ。あの襲撃で竜宮島の施設は損壊を被ったが、あの襲撃によって死人は出なかった」

あのままマークニヒトが攻撃を続けていれば施設だけではなく、人にまで影響が及んでいただろう。

今や島中にいる彼女が背負う痛みも、今より苛酷であった筈だ。

それが少なからず軽減されたのは、今目の前にいるファフナーのコアの働きによってのものだ。

「それは……良かった……」

――思わず胸に手を当てた。ここには蓬莱島のコアによって再構成された疑似的な

心臓が動いている。
少なからず、あの行動には意味があった。蓬莱島のコアの記憶を呼び戻す以外のことが。
自分の選択は、失敗ではなかった。
万感の思いを込めて呟かれた声には銃口を下げさせる効果があった。
「……今の君は、北極で我々に見せた姿とは違うと明言出来るか」
「北極、北極……。あぁ、はい。俺に竜宮島と敵対する意思はありません」
北極でのマークニヒト。その記憶を参照して榊ははっきりと答えた。
インカムから「?.発見器に反応はありません」と応答が来た。
史彦から見ても、こちらを見つめる目に嘘はないと断言できるものがあった。
「今の君はフェストゥムに同化されているのか」
「いいえ。もう同化はされていません、これからされる予定も無いです」

次々と出される質問の答えに何ら嘘は無かった。
もう竜宮島側の答えは決まったようなものだった。

「我々竜宮島は石上榊を受け入れることをここに宣言する」
「俺を受け入れることによって、俺にまつわる諸々の事情がこの島に降りかかるかもしれませんよ」
「その時は君にも力を貸してもらおう。頼めるかね」
「いやまぁ……いくらでも力は貸しますけれども……。どうぞ、これからよろしくお願いします」
すっと出された皺の多い手。それを榊は――握る。
質問はいつの間にか他愛のない世間話に変わっており、警戒していた溝口が陽気に会話してくるくらいには警戒が解かれていた。
何故こんなにもお人好しなんだろうか、頭を悩ませながら榊も――密かに決意した。
ここに、石上榊とクジラの正式な竜宮島への入島が決まった。

◇

何度も言った。「俺を受け入れることで厄介ごとが来る」と。でも受け入れるとはこ

れいかに。
いや、これはこれで良かったとも言うべきか。竜宮島で過ごしていれば、蓬莱島との違いが更に分かる筈だ。良い機会だ、存分に学ばせてもらおう。
あの対談後は受け入れに当たって俺の引取先とやらをどうにかするって話をされたが、丁重にお断りしてアルヴィス内部に部屋を用意してもらうことになった。何やら前例がいる様だし、あちらも監視が手軽に出来て良い筈だ。
この場合の引取先というのは、アルベリヒド機関のプロジェクトの一つ、人工子宮コアギュラの子供の引取先のことだ。単に養子の受け入れとも言う。アルベリヒド機関の定めた標準にある家庭であればコアギュラの子供を引き取ることが可能になるが……。
他人に引き取られたって微妙な気持ちになるのが本心。俺は確かに蓬莱島の人工子宮から産まれたが、親は生涯あの人だ。あの人が俺を見ていなかろうがな。
余計な思考は逸らし、あの会議に使われた部屋から医務室に溝口の警備と共に移動している。
しかし、何やらパイロットスーツを着た集団が向かい側から見えた。
その先頭に立つ黒い髪に黒い目の少年と目が合った。
「ザインのパイロット……」

真壁一騎だ。
もしかしてあの対談時に俺が暴走した場合に抑える戦力としていたとか……？
まぁ、マークニヒトが暴れたならマークザインに。竜宮島で運用されているノートゥングモデルよりもザルヴァートルモデルの方が拮抗出来るしな……。
「聞きたいことが一つある」
「何でしょう」
「俺達は一度、駄菓子屋で会ってないか？」
駄菓子屋……？　あっ。
「なるほど。確かに駄菓子屋で会ってますね」
「じゃあ、その時は黒いもやの姿で、今は人の姿をしているのは何でだ？」
「おいおい、んなこと初耳だぜ？」
「すみません。あの後にあった事でちょっと忘れてました」
「あー……そりゃ仕方ねーか」
悩んでいる俺を他所に溝口と真壁一騎が喋っている。その後ろから茶髪の少女からの視線をひしひしと感じてる。
「んで、どうなんだ？」
「俺があの時はもやで、今は人の形を取れている理由ですよね？　少し難しい問題です

が……」

何度も内容を確認するとパイロットたちが頷いている。

あの時の俺はもやの姿だった。それはここにいるパイロット達も、そして俺に乗っていた狩谷だって俺のことをもやだと視認していた。アイツの時は……微妙だから置いておく。

最初の俺は確か……ファフナーのことをロボットだと思っていて……？

あっ、なるほど？

「俺がミツヒロについていた時は自己認識がしっかり出来なかったので、ああいうもやの形で視認されてたんだと思います」

「自己認識……だと？」

見覚えのある赤い髪のパイロットが反応した。

「俺でも少し微妙な気がしますが……、ファフナーのコアになると自分が自分たる証明である記憶がとても重要で、それがあるからコアになっても俺は石上榊のままでいられる……ような？」

「……なるほど？」

頑張って言語化してみたはいいものの、互いに首を傾げる状態になってしまった。

いや、真壁たちは『昔はもやで今は人の形しているのは何故？』だから回答としては

間違いのない筈だが、前置きした通り俺でも微妙に思う答えだな……。

その場はそれで解散して、溝口に俺の部屋になる予定地までのルートを案内してもらってから、医務室へ連れて行かれた。溝口による監視は続行らしい。

そこで話されたのは体内のチップのコードを使って行われていた制限の解除について。

今まで俺の体内チップのコードには制限が掛けられており、俺がアルヴィスから出ようとするとアラートが鳴る仕様だったらしい。……部屋の中で大人しくしているのは結果的に良かったってことか。

「貴方は竜宮島内を歩けるようになったわ。でも、明日また医務室へ来てもらえるかしら」

「分かりました」

「それで、聞きたいことがあるの」

「何でしょう」

「石上くん、学校に通ってみる気はあるかしら」

「えええええええええええ……？」

「今は夏休み期間だから、お前さんが行くのは二学期からだな」
「さっきまで銃口向けてた奴に言う言葉かぁ？」
思わず敬語が外れた言葉で話してしまった後、背中をバシバシ叩かれた。
「ファフナーのコアだろうとお前さんは子供だよ。子供は元気に学校通って勉強して飯食って遊ぶのが仕事だしな」
「……」
いや、よく考えれば俺は高校生辺りの年になるのだから、島民として与えられる第一種任務――非常時以外は学校の教師やら酒造屋やらをして子供にアルヴィスの仕事を悟らせず、平和を継承していく為に定められたもの――は学生が妥当か。
「俺が編入されるとしたならどの学年に？」
「そうね……。これから行う学力テストの結果にもよるけれど、高校二年生辺りかしら……」
「ははぁ……」
高校二年生、学生としては一番青春を謳歌出来る時期じゃないか？
蓬莱島じゃ最大で中学生までだったからなぁ。となると、島の中で俺が一番年長だった訳か……？

とんとんと書類を整えた遠見先生の眉がキリッと凛々しくなった。
「それでは、早速別室に移ってテストを始めますからね」
「了解しました」
あの会議室で筆記試験、英語に関してはリスニング試験込み。英語は散々だろうが、他の教科に関しては少しばかり自信がある。なんたって、数学に関しては公式が見覚えのある物ばかりだったから俺（マークニヒト）の電卓機能を使えば簡単に……ゲフンゲフン。
結果は後日知らされるらしい。英語の方は返されても点数を見たくないな……。